#5026
Sack #6
DOC
#18

日米戰はゞ

池崎忠孝著

新潮社出版

Prod. No. 155
S. A. No. 5026
Sack No. 6
Item No. 18

日米戰はゞ

池崎忠孝著

新潮社版

1494

愛知縣知多郡大府町字稗山十一番地
中島飛行機株式會社
半田製作所大府工場

池崎忠孝著

日米戰はゞ

—太平洋戰爭の理論と實際—

新潮社出版

新嘉坡市街

マナバ市

香港ミルス灣

太平洋戰略圖

カスラア

島群ンヤシーコリア

マリアナ

ンリロカ

アーシャル

角岬ドンモヤイ安吐布

序

想起す。予偶々時弊を慨するところあり。特に一書を著して米國の怖るるに足らざる所以を說き、これを戰略的に太平洋の現狀について說明したるは、既に十一ケ年前の過去となれり。

然るに、日露戰爭の末期以來、米國の我が國に對する壓迫は、歲とともに苛辣の度を加へ、その政策の具體化さるるに當つては、或は軍縮條約となり、或は九ケ國條約となり、或は不戰條約となり、彼の爲すところは、時と場合とに應じ、あらゆる手段と方法とを盡して、殆んど剩すところなし。しかも、當時の我が國は、惶々とし

て米國を怖れ、その一顰一喝の前には、到底手も足も出す能はざる狀態なりき。

既往は姑らくこれを措き、試みに、スチムソン外交の中期より、現在のバル外交に至るまでの間、米國の對日政策を一貫する根本方針が、果して那邊にありしかを想へ。米國の所爲は、徹頭徹尾我が國の擡頭を抑へ、あはよくばこれを一蹶また起つ能はざるの窮地に追ひ込まんとするにあり。從つて、支那事變の勃發以後、米國の態度は、唯我が國當面の敵國として、堂々と名乘りを擧げずといふに過ぎず。その露骨なる援蔣政策に至つては、何等抗日支那の與國たると異るところなし。

我が國にして小心翼々、偏へに米國を怖れ、且つ米國を憚る限り、

彼は愈々增長して、更により一層の壓迫を吾人の頭上に加へ、吾人をして窘窮終に成すところを知らざるに至らしむべし。熊襲を伐たんがためには、先づ新羅を制せざるべからず。新羅を制するの自信なくして、徒らに熊襲を伐たんとして焦慮することあるも、その事果して成就すべけんや。

古往今來、史を繙くに、凡そ米國ほど我儘勝手なる國はあらず。彼は斷えずモンロー主義を主張して、極力新大陸に對する舊大陸の干渉を非とするに拘らず、彼は進んで舊大陸に對して干渉し、毫も自己の矛盾と撞着とを顧みざるなり。殊に、その我が國に對するや、國際條約の神聖を說くこと、特に嚴刻を極むるに拘らず、彼は自國の大統領が參加して締結したる媾和條約さへ、これを破棄して何等

恥づるところなし。

吾人は、米國が嘗てメキシコに對して爲せるところを忘却せず。嘗てキューバに對して爲せるところを忘却せず。嘗て比島に對して爲せるところを忘却せず。嘗てエクワドル及びハワイに對して爲せるところを忘却せず。彼の所業、かくのごとく放縱無頼にして、尚ほ正義人道の總本山たるかのごとく裝ふといへども、天下何人かよくこれに欺かるるものあらん。

宜なり、一億數千萬の米人中、時に自己の良心を僞る能はざるものあり、彼は嘗て米國の門戸開放主義を評し、そは唯單に英國の帝國主義を模倣したるに過ぎず、素より利他主義にもあらず。博愛主義にもあらず、一種のポーカーゲーム以上の何物にもあらずと喝破

せるや。門戸開放主義にして然り。米國の好んで口にするところは、結局利己主義のお題目、自愛主義のお念佛たるに過ぎざるのみ。

支那事變は、今や重大なる段階に到達せり。しかも、日獨伊三ケ國の協定成立するに至つて、我が國究極の目的たる大東亞新秩序の建設は、さらに深刻なる意義と使命とを以て、新たに世界史の進展に參加することとなれり。かかる新事態に對應して、よくその任務を遂行せんがためには、すべての障壁、すべての峻嶮、擧げてこれを突破し、只管直往邁進せざるべからず。況んや、一米國の區々たる妨害の如き、斷乎これを粉碎するの決意なくして可ならんや。

南支那海は、我が國のカリビア海にして、南洋諸島及び東南アジアは、我が國の中央アメリカ及び西印度諸島なり。東亞共榮圏を確

立し、そこに新らしき世界秩序の一環を形成せんとする我が國の熱意に對し、米國は何等容喙すべき理由を有せず。理由を有せずして、尙ほ且つこれを阻まんとすることあらば、吾人は起つてこれを一蹴すべきのみ。

予は斷じて好戰者流にあらず。太平洋の戰略に關する述作、積んで山を爲すの觀あるも、予は未だ嘗て米國と戰ふべしと主張したることなし。予は今日まで米國怖るるに足らず、毫もこれを憚るの要なしとは說きたることあるも、米國怖るるに足らず、故にこれを伐つべしとは說きたることなし。敢て言へば、予は戰爭を好まず。能ふかぎりこれを避くべしといふ點において、毫も人後に落つるものにあらず。

しかも、米國尙ほ反省せず、依然として我が國の進路を遮ぎり、延いて我が國の存立と理想とを脅かさんとすることあらば、吾人は斷然これと戰ふべしと主張するものなり。米國の富强は、恐らく世界に冠たるものあらん。吾人は敢てそれを疑はず。然れども、戰爭の勝敗を決する要因は、自ら他に在り。吾人は天理を信ず。儼として天理の存する以上、米國の富强を以て可能とするものには、當然限度あるを知らざるべからず。

我が國は、今や非常の時に際會せり。區々たる常識論に拘泥して、徒らに躊躇逡巡する時にあらず。吾人にして、よく吾人の爲すべきことを爲さば、他は擧げてこれを運命の裁決に委ねて可なり。古人は死中に活を求むといふ。非常の時に際會せる吾人は、獨り死中に

活を求むるの方法あるを知るのみならず、時として死中に活を求むる以外、他に何等の方法なきことあるを知れり。

紀元二千六百一年一月中旬

於河内野崎寓居

著　者

加藤寛治大將より著者に贈られた書簡

不圖思ひ付くところがあつて、往年加藤寛治大將閣下から著者に對して贈られた私信を公表することにした。加藤大將はすでに亡くなつた方であるし、しかもその人の私信であるから、これを公表することはどうかと思つたが、大將は在世中斷えず私を激勵して海軍問題の研究を慫慂して與れられた方であるし、この私信の中に書いてある開戰時期の問題なども、此際の我が國にとつて頗る適切な教訓であると思つたから、終に勇を鼓してこれを公表することにした。地下の大將は、おそらく私の衷情を察して與れられるに相違ない。

肅啓　春寒料峭の候益御清適大賀至極に奉存候陳者貴著『六割海軍戰ひ得るか』の脱葉に付御通知申上候處早速新版御送附を辱し却而恐縮に存候貴著拜讀一々透徹明察敬服致候貴論の如く我帝國の戰略的地位は蓋し天惠とも可申我海軍の寡を以て良く米の優を封じ以て帝國の獨立と八紘一宇の大理想を貫くべき使命の據る處と唯々　皇天に感謝致候

而かも此天惠をして空からざらしめんには國民をして徹上徹下に之を諒解せしめ全幅利用すべく開戰時機の撰定を誤らざること生死の岐路にて詳細は軍機に渉る故申上兼候得共要するに世界大戰の開幕に當て英國海軍史家をして開戰前の no men's land を欺ぜしむることなからしむるに有之外交と戰略と背馳してゲーベン、ブレスロウを逸しトローブリッヂ將軍をして軍法會議の憂目を見せしむるが如き我國にては最警戒を要し候

『將者國之司命』と申て元寇の時宗日清豐島沖の東鄕共に外交の逡巡を一決して國家司命の重責を全せられたるものに候開戰か非乎逡巡の間に戰機を逸し大敗の因を起生するは實に宣戰布告前の數日に有之一歩を誤れば實に前述の如くノーマンスランドと爲し了るものに候グ翁は大國民たるものは世界の政治的(戰略的)地理に通曉せよと申候事實に明戒に候

回顧候へば卅六年の昔米國が布哇を併合せる時に當り小生は東鄕艦長(元帥)の部下として軍艦浪速の候補生にて警備に從事致居候が當時の日本國民にして布哇の地理を知悉せしもの眞に幾人かあると申し度ほどにて日本の爲め太平洋上一大癌を殘すべしとは上下を擧げて風馬牛に有之今にして追懷遺る方なき痛恨を感じ申候以上直感のまま貴酬に相添申候妄言御寛恕の程海岳奉祈候

敬具

昭和六年二月九日

加藤寛治

池崎忠孝様　玉案下

凡例

○日米兩國の風雲急なるに鑑み、急速本書を執筆することにした。『新嘉坡根據地』を以て、私の軍事に關する述作は終ることにするつもりであつたが、刻々として變化する東亞の形勢は、私をしてまたもや此種の述作をなすの止むなきに至らしめた。

○本書の讀者諸君は、何卒『太平洋戰略論』および『新嘉坡根據地』の二著を併讀して頂きたい。實をいふと、太平洋の戰略的狀勢、および英米協同作戰に關する諸問題は、上述の二書においてこれを詳細に說明してあるのみならず、太平洋における各國の防備狀態、根據地の現狀、その他一切の詳細なる說明は、皆前記の二著においてこれを試みてゐる。從つて、本書においては、それらに關する事項は、これを出來るだけ省略するに努め、唯必要な場合においてだけ、多少それに觸れることにして置いた。

○本書を述作するに當つては、例の如く多數の文獻を參考に供したが、それは一々本文中に明記しなかつた。唯雜誌においては海軍有終會發行の『有終』。新聞紙においては大阪朝日新聞、大阪毎日新聞、および讀賣新聞の外國電報その他から、多大の參考資料を得ることが出來た。特記してこれを感謝する。

○尙ほまた本書の執筆に就ては、海軍省報道部の高瀨中佐および田代中佐から、いろいろ激勵されるところもあり、且つ種々の參考資料なども惠與されたので、大いに利益を享けるところがあつた。兩氏の御厚情に對して、厚く感謝の意を表する。

○これは餘計なことだが、私が始めて新潮社の支配人中根駒十郎氏と交渉を有つたのは、すでに二十有餘年の過去となつた。爾後頻と御無沙汰に過ぎてゐたが、私が議會に出るやうになつてから、また時々御目にかかるやうになつた。往年の美男子、今尙ほその俤を喪うてはゐないが、さすがに寄る年波には打ち勝てないものと見えて、近頃では鬢髮すでに霜を帶いて、斯人亦老境に入るかの感に堪へない。二十有餘ケ年の後、また再び私の原稿が同氏の手を煩はすことになつたかと思ふと、私も坐ろに懷舊の情切なるものがある。

目次

第一　歷史的必然……三
現狀維持の桎梏……三
滿洲事變以後……八
三國協定の成立……一六
第二　米國の驚愕……二二
昂奮と反省……二三
米國史の新事例……二九
吾人の心の準備……三三
第三　眞の世界戰爭……四四
戰端開始の形式……四四

戰爭の全面的形態……五〇
災厄中の災厄……五六
第四　海洋の大史劇……六三
地理的制限……六三
宏大なる海洋……六九
全軍使用の限界……七五
第五　立役者日本……八三
海軍中心の戰爭……八三
日本海軍の立場……九〇
米國海軍の標的……九七
第六　日米兩國海軍……一〇六
日米海軍の現勢……一〇六

日本海軍の全勢力比……一一五
日米海軍の實質……一二八
第七　協力國の援助……一三五
英米協力の限度……一三五
英國艦隊の任務……一三〇
獨伊兩國の協力……一四二
第八　日本への遠征……一四八
渡洋進攻作戰……一四八
前進根據地としての比島……一五八
比島の本質的缺陷……一六五
第九　對日封鎖の夢……一六九
愉快な樂天論……一六九

遠距離封鎖……一七四
假定と獨斷との誤謬……一八二
第十　新嘉坡攻略……一九〇
戰爭開始の時機……一九〇
新嘉坡の武裝……一九七
攻略戰の構圖……二〇三
第十一　香港と比律賓……二一一
香港の防備其他……二一一
比島攻略の意義……二一〇
濠洲と蘭領印度……二一六
第十二　貿易破壞戰……二三四
米國の潛水艦戰……二三四
日本潛水艦の任務……二三九
米國の共同防衛計畫……二四七
第十三　可能と不可能……二五五
日本空襲の夢……二五五
米國の窮策……二六〇
巴奈馬運河と布哇……二六五
英領諸島の奪取……二七二
第十四　長期疲弊戰……二七六
攻めた方が負け……二七六
貿易破壞戰と獨伊の協力……二八二
米國海軍力の膨脹……二八八

第十五　日本必勝の信念　……二九七
歴史進展の急潮　……二九七
日本人の執るべき態度　……三〇三
米國の弱點　……三〇九

日米戰はゞ

池崎忠孝著

第一　歴史的必然

現狀維持の桎梏

重大な性質を帶びた歴史上の事實の中には、それが當然さうあるべくしてさうなつたものと、別にさうなるべき當然の理由はないが、そこに何か特別な事情とか動機とかいつたやうなものが介在して、止むなくさうならざるをえなかつたものとの二つがある。

一昨年の八月二十三日、モスコーにおいて締結された獨ソ協定は、明かに後の場合を示した歴史上の事實であり、昨年の九月二十七日、ベルリンにおいて成立した日獨伊三國協定は、明かに前者の場合を示した歴史上の事實である。

英米佛本位の世界秩序

日獨伊三國協定の成立は、當然さうあるべきものがさうなつたのだから、その成立の理由および過程において、毫も不自然だとすべきところはない。現在の世界における三ヶ國の立場は、ほとんど同樣だといつてもいいし、現在および將來の三ヶ國が辿り、且つ辿らんとする進路も、大體その方向を等しうしてゐる。殊に、三ヶ國の國家的性格は、その氣分および氣質において酷似してゐるのみならず、そのあひだに何等利害の衝突するものもなく、しかも三ヶ國の進路に當つて、これを阻まんとする敵は、いづれも三ヶ國に共通するものだから、その境遇と目的と脅威とを等しうする三ヶ國が、互ひに手を携へて行を與にし、互ひに相依り相扶けてその道を進まうとするのは、素より當然以上の當然だといはなければならぬ。

デモクラシー國家群の代表的指導勢力ともいふべき英米佛の三ヶ國は、所謂ヴエルサイユ體制を確立することによつて、彼等に最も都合の好い世界秩序を考案し、それをもつて不滅の黃金律たらしめようとした。かかるヴエルサイユ

ヴエルサイユ條約

デモクラシー國家群のみの幸福

體制の確立することによつて、もつとも致命的な打擊を蒙り、これある限りは未來永遠に亙つて、再び擡頭の機會を與へられる望みを喪つたものは、勿論戰敗國の統領ともいふべきドイツであつたが、英米佛三ヶ國の陰險苛辣な政策は、ひとりドイツのみを壓迫するをもつて足れりとせず、昨日まで自己の僚友として共に戰つて來た日伊兩國をも併せて、これを將來の勢力圈內から放逐しようとし、ドイツを壓迫するにヴエルサイユ條約をもつてしたと同じ筆法で、日伊兩國を壓迫するには國際聯盟および軍縮條約をもつてし、これに對して彼等が不變の忠誠を盟はない限り、彼等は世界永遠の平和を破壞し、且つ人類の幸福と繁榮とを蹂躙する不埒者だといつたやうな高壓的な態度を執つて來た。

だが、事實は果してどうであつたか。

ヴエルサイユ體制が確立することによつて現出した世界は、その實デモクラシー國家群のみの幸福と繁榮とを保障する世界であつた。その上には明かに現狀維持といふ四個の文字が烙印されてゐた。この文字の神聖が喪はれない限り、

それによつて利するものは、アングロ・サクソン民族の双生兒ともいふべき英米兩國であり、且つ英米兩國に追從し、ことごとにその頤使に甘んずる代償として、斷えずその勢力の庇護の下に置かれてゐるフランスであつた。

彼等は、いづれも宏大な領土を有つてゐた。豐富な資源を有つてゐた。宏大な領土と豐富な資源とによる廣汎な市場と無限の生産力とを有つてゐた。しかも、貪婪飽くを知らない彼等は、ひとり地上を獨占するに止まらず、さらに海上をも私せんとして、その海軍力の絶對的優越を保障する各種の手段と方法とを案出した。

從つて、英米佛の三ヶ國にとつて必要なものは、何よりも先づ現狀維持であつた。現に存在してゐる國境は勿論、現に存在してゐる權利義務の關係や、現に存在してゐる利害損得の狀態などは、それが現に存在してゐるといふだけの理由によつて、それは絶對に神聖侵すべからざるものであるとされた。

かかる宣言に對しては、過去の如何なる因緣も、現在の如何なる情實も、

あらゆる生存競爭は否定される。

切その價値と權威とを認められず、あるがままの狀態を、ただあるがままにあらしめることのみが、絶對に必要且つ合理的だといふわけだから、各國が馬鹿正直にこの宣言を受け納れ、忠實にその趣旨を遵奉してゆくと、あらゆる生存競爭の法則は否定され、すべての自然的發展の原理は抑止されて、世界は何時までも同一場所で足踏みをつづけ、現に貴族であるものは、永久に貴族であるとともに、現にルンペンであるものは、永久にルンペンであらねばならないといふことになつて來る。人類の進歩を約束する歴史の本質からいつて、世にこれほど莫迦げたことはあるまい！

尤も、大した國民的アスピレーションをも有たず、與へられた境遇と運命とに滿足し、何とかして現在の生活をつづけ、それによつて身分相應な平和を樂しむことが出來さへすれば、それで他に何も求めるところはないといつたやうな無氣力な群小國家にとつては、デモクラシー國家群の代表的指導勢力ともいふべき英米佛の三ヶ國が案出した現狀維持の法則は、やがて彼等の安全を保障

小數國家の立場

する一種の律法ともなるべきものだといふ意味で、むしろ彼等の歡迎するところであつた。

しかし、イタリーはどうか、ドイツはどうか、さらにまた日本はどうか。これらの少數國家は、いづれも有爲な能力を有する天才國民によつて成立し、その人口は多く、しかもその增殖率は高いのみならず、これを養ふべき領土と資源とに惠まれてゐないから、その商工業を發展せしむべき地域さへ、非常に限局されたことになる。從つて、彼等が若し忠實に現狀維持の法則を遵守し、謹んで英米佛三ヶ國の制令を奉じてゐたら、彼等は間もなく饑餓の慘に陷り、遠からず自滅の一途を辿る外はあるまい。これ果して彼等の善く耐へ忍び得るところであらうか。

滿洲事變以後

最初の爆彈

軍縮條約をも破棄した

當然起るべきものは、當然起らなければならなかつた。

滿洲事變の勃發は、日本が敢然として現狀維持の陣營に投げつけた最初の爆彈であつた。この爆彈が炸裂するや、英米佛の三國をはじめ、その陣營にあつたすべての小國家群は、いづれも度を喪つて總立ちとなり、彼等の所謂大膽不敵な現狀破壞者に對し、あるものは聞くに堪へない漫罵をもつてこれを非難し、あるものは怒號してこれを威嚇し、あるものは腕を扼してこれを阻止しようとした。だが、日本は屈しなかつた！　一たび意を決して蹶起した以上、たとへ世界を擧げてこれを敵とするやうなことがあつても、日本は斷じて屈するものでないぞといふ意氣を示した。

スチムソン外交の破綻に引きつづいて、國際聯盟の總退却がはじまつた。日本は勝つた。勝つた日本は、滿洲においてその欲するところを行ふと同時に、自己の自由を縛つてゐる最後の紐ともいふべき軍縮條約をも破棄した。將來の樞軸國家に對して與へらるべき輝かしい勝利は、その時すでに約束されてゐた

のである。

滿洲事變の進行中、ちつとその經過を傍觀してゐたイタリーは、心中早くも決するところがあつたに相違ない。一九三五年十月のエチオピア戰爭は、現狀維持の陣營に擲げつけられた第二の爆彈として炸裂した。

ヨーロッパは驚愕した。ほとんど昏倒せんばかりに驚愕した。彼等は再び無益な絶叫をつづけ、再び徒勞を繰返した。歐洲大戰後、早くも往年の意氣を喪ひ、老耄すでになすなき境涯にあつたにも拘らず、みづからヨーロッパの覇者をもつて任じてゐた英國は、自己の面目を保持する上から言つても、そのままこれを默過してゐるわけにはゆかず、止むなくその軍艦を持ち出して、これをそちらこちらへ動かして見ることにより、あはよくばムッソリーニの行動を牽制しようとした。

だが、滿洲事變の進行中、その兜の奥の奥まで見透かしてゐるムッソリーニは、さういふ子供騙しのこけおどしなどに引つかかつて、簡單にその素志を翻へすやうな生易しい人物ではなかつた。英國が慌てれば慌てるほど、彼はますます落着き拂つて、悠々と自己の欲するところを行ひ、終にその目的を達した。一九三六年五月のエチオピア併合宣言は、むしろ英國の覇權を葬る輓歌として聞くべきものである。

現狀維持の陣營に擲げつけられるべき第三の、そして最も大きな爆彈は、一九三三年一月、首尾よくドイツの政權を握つたヒトラー總統によつて、窃かに準備されつつあつた。

彼は眼前に滿洲事變を見た。そしてまたエチオピア戰爭をも見た。彼が一種のテストとして斷行したライン進駐の結果は、さらにまた何物かを彼の確信の上に加へるところがあつたに相違ない。ヴエルサイユ體制の牢獄の中に拘禁されて、ほとんど手も足も出ない窮地に陷し入れられてゐるものがドイツであるとしたら、ドイツの國運のすべてを双肩に擔うて奮起したヒトラーとしては、日本のそれや、イタリーのそれよりも、より一層大きな爆彈を準備する必要が

あるし、その準備した爆彈を、いよいよ現狀維持の陣營に擲げつけようとするなら、あらかじめ乾坤一擲の大覺悟をする必要がある。

ヒトラーの天稟ともいふべき火のごとき情熱と、鐵のごとき意志とは、立派にそれを遣つて退けることが出來た。

私の眼前には、正しく今からほぼ三ケ年前の光景が浮んで來る。

それは一九三八年三月十四日午後のことであつた。英國議會の下院議事堂では、例のチエムバーレン首相が、あたかも老大國の衰弱と無氣力とを一身に象徵したかのやうな調子で、いかにも億劫らしく呟いてゐた。

彼はいふ。——我々の所見をもつてすれば、今次のドイツが採つた手段と方法とは、もつとも痛烈な非難に値するものだ。それはヨーロッパの平和維持の責任を委託されたものにとつて、かなり深刻な打擊を意味するのみならず、國際間の誤解を除去し、進んで國際協力を促進せしめようといふ英政府の希望に對して、ほとんど恢復すべからざる致命傷を與へたものだ。

彼は更に又いふ。——今次起つた事態は、明かにヨーロッパの經濟恢復を阻止するものだ。我々は顯著な退步が起らぬやうに、出來るだけ周到な注意を拂はなければならない、さりとて今は輕率に最後の決定を急ぐべき時でもない。

これを聞いて登壇した勞働黨主アトリーは、珍らしくもない聯盟復活主義を說き、引きつづいて登壇した自由黨のシンクレアは、公式的に軍備の强化を主張した。堪りかねたチャーチルは、議席を蹴立てて演壇に飛び上り、獨裁主義國家の侵略に對して、吾人は卽時英佛兩國を中心として團結し、侵略に對する相互防衛の條約を結ばなければならぬ。今次の事件は、これを既成事實として認めて葬り去るには、あまりにも重大過ぎはしないかと咆吼した。

恰度それと同じ日の同じ時刻に、オーストリーの首府ウキーンの市民は、熱狂と歡喜との渦卷の中にあつて、ほとんど沸騰するがごとき昂奮を示してゐた。

彼等は、前日の總統令をもつて公布された獨墺合併を祝福し、口々に、ein Volk, ein Staat, und ein Führer! を叫びながら、ヒトラー總統の宿舍たるイ

ムベリアル・ホテルの方向に對つて雪崩れてゐた。かかる喧騒の裡に發行された新聞紙の號外は、早くもヨセフ・ビユルケルが突擊隊の首領に任ぜられたことを傳へ、ウキーンの大僧正インニツツアが、獨墺合併に對して神の祝福を祈ると宣言したことを報じた。時しもイムベリアル・ホテルのバルコニーでは、多年の宿望を達したヒトラーが、異常の感激に打ち顫ふ聲をもつて叫んでゐた。

彼はいふ。——如何なる威嚇も、如何なる困難も、如何なる武力でさへも、絶對に我等を永久に結びつける紐帶を斷ち切り得るものはない。

彼は又いふ。——ケーニヒスベルクからケルンまで、ハムブルヒからウキーンまで、すべてのゲルマン民族が絶叫する自由と解放とを讃美する聲は、やがて吾人の將來における運命を支配するであらう。

當時の彼は、正しく凱旋將軍のそれであつた。彼の眼中には、英國もなければフランスもない。況んや、形骸のごとき國際聯盟をや。彼は斷々乎として自己の進まんとする道を進み、確實にその必要とするものを得た。

その當時、獨伊兩國を貫ぬく樞軸は、すでにその緊密度を高めてゐた。

從つて、アルプスの彼方に起つた大史劇は、毫もムツソリーニの平靜を搔き擾すことがなかつた。彼の心境に映じた獨墺合併は、一八四八年のハウスブルグ家に對するエグモントの謀叛以來、ずつと引きつづいてくすぶつてゐた叛逆劇に對し、最後のピリオツドを點じたものに過ぎなかつた。彼は自由獲得のためにイタリーが戰つた一八五九年以後の歷史を想起して、たとへドイツと國境を接することがあらうと、イタリーは毫も不安を感ずる必要はないと思つた。

彼はいつた。——兩國民は友人ではないか。しかもその友人たるドイツは、十ケ國と國境を接してゐるではないか。

獨墺合併に對するムツソリーニの回答は、ただ單に樞軸によつて結合された獨伊兩國の不變の友誼を高調することに盡きてゐた。心窃かに獨墺合併による獨伊兩國の反目と睽離とを期待してゐたヨーロツパの各國が、それによつて如何に極度の失望を感じたかは、ここに更めて述べる必要はあるまい。

三國協定の成立

世界史の急激な發展は、寸時もその休息を許さなかつた。

獨墺合併の大史劇が演ぜられてゐるあひだにも、アジアの復興を告げる支那事變は、依然としてその進行をつづけてゐた。獨伊兩國は、はるかにそれを祝福するのみならず、兩國を貫ぬく樞軸は、徐々に日本をも貫かうとする形勢にあつた。彼等はすでに意を決してゐた。ミュムヘン會議の結果、ズデーテン地方がドイツに併合された。ボヘミヤ、モラヴィヤ、およびスロヴアキヤも、間もなくドイツの保護下に置かれた。メーメルが奪還された。そしてイタリー軍はアルバニアに進駐し、獨伊兩國の間には、新たに軍事同盟が締結された。

すべては電光石火のごとくに行はれ、ほとんど息を吐く暇もなかつた。かかる急激な形勢の變化に對して、ヨーロッパにおける現狀維持の陣營は、果して

如何に振舞うたか。英國は啞然とした。フランスも啞然とした。啞然とした彼等は、なんら施す術を知らなかつた。

だが、早くも往年の意氣を喪ひ、老耄すでに爲すなき境涯にあつた英國と雖も、ドイツ軍のポーランド進擊に對しては、さすがに、手を拱してこれを傍觀してゐるわけにゆかなかつた。わづか五ケ月前に締結された英波相互援助條約は、いかにも英國の信任を問ふもののやうに、儼として彼等の眼前に存在してゐたからだ。

英國は止むなく、——眞に止むなく立ち上つた。英國が立ち上つた以上、フランスも知らん顏をしてゐるわけにはゆかなかつた。フランスもまた止むなく立ち上つた。一昨年の九月三日英佛兩國がドイツに對して宣戰を布告した時、ヨーロッパのデモクラシー國家群は、最後の望みを彼等の上につなぎ、彼等の有する絕大な力をもつてさへすれば、微塵にヒトラーの野望を碎き、彼等の死守するヴエルサイユ體制を復活させ、勝利の榮光をして、ふたたび現狀維持の

陣營の上を輝かしめるぐらゐなことは、さまで困難ではないと考へてゐた。

ところが事實はどうであつたか！

吾人はもはやドイツのノールウェー制壓作戰以來の悉しい戰局の推移について語る必要はあるまい。ナルヴイックにおける英軍の慘憺たる敗戰は、北歐におけるドイツの勝利を決定的ならしめた。デンマークは戰はずして降り、オランダは戰ひの眞似事をしただけで降つた。リユクサンブールも、ベルギーも、怒濤のごとく進擊するドイツ軍に對しては、もはや防波堤たる何等の役目をもなしえなかつた。やがてフランス軍との決鬪が始まつた。世界中の期待に燃ゆる眼は、一齊に難攻不落の評あるマヂノ線の上に注がれた。しかもそのマヂノ線でさへ、ドイツ軍の一擊の前には、ほとんど崩れかかつた粘土の墻壁たるに過ぎなかつた。轉瞬のあひだに、英軍は混亂し、フランス軍は潰滅した。そして、フランスの首府パリは、交戰わづか二週日の後、すでにドイツ軍によつて占領され、へんぽんたるハーケン・クロイツの旗は、今やアーク・ド・トリオンフの上に翻つてゐる。

取り殘された唯一人の鬪士は、辛うじて兵を大陸より撤し、自國の天險に據つて、やうやくドイツ軍の猛攻を支へてゐる英國である。

頑强なチャーチルは、依然として屈するところなく、ヒトラーが如何に焦慮したところで、吾人は斷じて打ちのめされることはない、今や海岸は鐵壁のごとく防禦されたし、空軍の弱勢も底を衝いた。さなくとも强大な英國海軍は、アメリカの驅逐艦五十隻の增援をえて、今後一層强化されるはずだし、歐洲大陸に對する英國の封鎖は、間もなくドイツの咽喉笛を絞めつけることになるに相違ないといつてゐる。

公平な第三者からいふと、現在の英國は、遺憾ながら顯然たる敗形の下に置かれ、ほとんど絶望戰の形態にさへ陷つてゐるものとしか思へない。試みに想像せよ。連日連夜の爆擊。それも何時になつたら止むといふ見込のない爆擊！その凄慘な爆擊の下に曝されて、一日二十四時間、絶えず戰々兢々とし、ほと

ヴェルサイユ體制影を留めず

んど自分を顧る暇もないといふ英國が、いかにして現在の頽勢を挽回し、いかにして過去の勢威を恢復しようといふのか。

忌憚なくいふと、滿洲事變の勃發から、今度のヨーロッパ戰爭の勃發に至るまでの約十ケ年間、不撓不屈な惡戰苦鬪の結果、現に樞軸國の名をもつて呼ばれてゐる日獨伊の三ケ國は、執拗なデモクラシー國家群の反擊を排除しながら、漸を追うて現在の地歩を固め、今一息で最後のゴールに達せんとする瀬戸際まで漕ぎつけて來た。

一時平家の全盛を思はせた現狀維持の陣營は、今や潰滅して殆んどその影を見ない狀態であるし、一時不滅の黃金律だと考へられてゐたヴェルサイユ體制も、今や殘りなく寸斷されて、ほとんどその跡を留めない有樣となつてゐる。多年おなじやうな境遇に置かれ、おなじやうな目的を抱き、おなじやうな脅威に處し、おなじやうな敵と戰つて來た日獨伊の三ケ國が、唯一の殘敵たる英國を擊破して、いよいよ決定的な勝利を獲得する日は、すでに眼前に迫つて來た。

日本の行動を妨碍するアメリカ

しかもその重大な瞬間において、强大な新敵國が現れ、將に沒落せんとする英國を救ひ、兼ねて彼自身立つてみづから日獨伊三ケ國の鋭鋒に當らんとする形勢を生じたとしたら、かかる形勢に當面した日獨伊の三ケ國は、果して如何にこれに對處すべきであらうか。過去十ケ年間の國際情勢の推移を知り、且つ現在の日獨伊三ケ國が立つたゐる地位の如何を理解するものは、日獨伊三國協定の成立をもつて、當然さうあるべきものがさうなつたことを認め、それをもつて一種の歴史的必然の產物だとさへ考へるであらう。

滿洲事變の勃發以來、もつとも峻劉な態度をもつて日本に對處して來たものはアメリカである。現に支那の抗日政權を掩護して、手を代へ品を代へて、極力日本の行動を妨碍してゐるものもアメリカだ。しかもそのアメリカが、陰に陽にヴェルサイユ體制を支持し、みづからデモクラシー國家群の旗頭となり、進んで現狀維持の陣營に馳せ參じ、將に英國の沒落を救はんとしてゐるとすれば、アメリカに對する日獨伊三ケ國の立場は、全然その性質を等しうするもの

だから、かかるアメリカの干渉に對して、日獨伊三ケ國が共同戰線を張り、互ひに手を携へて行を與にし、互ひに相依り相扶けてその道を進まうとするのは、素より當然以上の當然であつて、毫も不可思議とすべきところはない。

アメリカは、いはばみづから求めて日獨伊三ケ國を敵としたもので、日獨伊三ケ國は、止むなくアメリカを敵とせざるをえなかつたものだ。從つて、アメリカが即時舊大陸から手を引き、アジアおよびヨーロッパの將來をして、その成るがままにならしめるだけの雅量さへ示したら、今太平洋および大西洋の上に搖曳する暗雲は、間もなく雲散霧消して、アメリカは再び快い天日を仰ぐことが出來るであらう。

第二　米國の驚愕

昂奮と反省

日獨伊軍事協定成立の飛報を手にした當時のアメリカは、口でこそすでに織り込みずみになつてゐる事實で、今更別に驚くには當らないとか、または實際上すでに存在してゐたのも同然な事實だから、それがこのたび成文化したからといつて、何も兎や角氣を揉む必要はないとか、例によつて例のごとき減らず口を叩いてはゐたが、その實內心ではよほど重大問題だと考へたものと見え、さすがに驚愕の色蔽ひがたいものがあつた。

殊に、同協定の成立後、間もなく近衛首相の京都聲明なるものが發表され、

アメリカが日獨伊三ケ國の立場を理解せず、このたびの三國同盟を敵對行爲と見做し、あくまでこれに對して反對の意嚮を固執するといふことであれば、日獨伊三ケ國は、敢然アメリカを敵として一戰するを辭するものでないと述べたことは、それを述べた人が人であるだけ、アメリカをしてより一層強く三ケ國の決意を感取させたものと見え、ワシントン政府は、直ちに重要閣議を開催するのみならず、それまでは比較的愼重な態度を保つてゐた政府筋の高官たちでさへ、かなり露骨な用語を用ひて、これに應酬するものも現れて來た。

一例を擧げると、例のノックス海軍長官だ。

昨年十月五日、ワシントンの警察幹部養成所において、彼は一場の演說を試み、アメリカ人は、他國人から威嚇されて尻込みをするやうな腰拔けではない。吾人は未だかつて外國と戰つて負けたこともないし、吾人の現に保有する海軍は、明かに世界最大最强のものだ。最後的決斷および試練の時期は、今や刻々として近づきつつあるが、吾人は敢て全體主義世界制覇の夢における最後の障

主戰派の旗頭ノックス海軍長官

ハル國務長官の樞軸國攻擊

碍となるであらうといつた。

ノックス海軍長官と言へば、ワシントン政府における主戰派の旗頭ともいふべき人物だから、彼が假にさういふ挑戰的な言辭を弄したからといつて、强ち不思議がるにも當るまいが、さういふ挑戰的な言辭を敢てするものは、ひとりノックス海軍長官ばかりではない。日獨伊三國軍事同盟の成立が、いかに力强い衝擊をワシントン政府に與へたかといふことは、これによつても充分想像することが出來るであらう。

現に、ワシントン政府の國務長官として、もつとも重大な責任を負擔する地位にあるハルでさへ、昨年十月二十六日の夜、全米新聞記者クラブ大會において、特に日本に對する一場の所見を述べ、日本は滿洲事變において世界戰亂の口火を切り、且つ軍縮條約の破棄によつて建艦競爭を挑發したと斷言したのみならず、日本を含む樞軸國を非難し、これら諸國の支配者たちは、秩序ある國際關係の傳統的原則を無視し、苛酷な手段および方法によつて、この文明世界

を奴隷の世界たらしめんとしてゐるから、吾人の自由と獨立とを擁護するために、吾人は終に起つて戰ふの止むなきに至るであらうと言つてゐる。

責任あるワシントン政府の高官たちでさへそれだから、さなくとも鼻息の荒いアメリカ海軍の提督たちが、ちつと默つて引込んでゐるはずはない。

例のヤーネル提督一派は、一種の神託的戰爭論ともいふべき二週間内日本艦隊擊破論を擔ぎ出して、相變らずおさかんなところを御披露に及んでゐるし、元のアメリカ海軍作戰部長スタンレー提督なども、これと恰も相呼應するもののごとく、あくまでアメリカ海軍の强壓による日本牽制を主張してゐる。

アメリカ海軍省の作戰專門家たちが、ルーズヴェルト大統領をはじめ、ノックス海軍長官、リチヤードソン米國艦隊司令長官以下、アメリカ海軍の最高首腦部に宛てて、特に長文の意見書を提出し、現在のアメリカ海軍は、その缺員を補充し、且つその豫備隊を太平洋に召集さへすれば、極東の情勢を支配するために、その强力な部隊を數千海里の彼方に派遣し得るであらうと進言し、暗

日本との開戰を慫慂

冷靜なる輿論

に日本との開戰を慫慂してゐると稱せられるのも、まんざら無根のデマだとばかりは言ひ切れないものがある。

ところが面白いことには、ワシントン政府の高官たちや、アメリカ海軍の首腦部たちが、無暗に昂奮して騷ぎ廻つてゐるのに引き較べ、アメリカの一般輿論ともいふべきものは、むしろ意外に落着いてゐて、各種新聞紙の論調などを見ても、さまで調子の外れた議論は行はれてゐない。

現に、スクリップ・ハワード系新聞の主宰者たるロイ・ハワードのごときも、三國同盟成立の直後、みづからその私見を公表し、日米關係の打開は必ずしも不可能ではないと言ひ、さらに語をついで、それを惡化させたものは、明かにニュー・ディール派の議論倒れの無能さであると斷じ、もしアメリカが寬容に對日接近を圖り、日本もまたそれと同樣な態度でこれに應ずるならば、日米兩國間に現存する無用の對立は、容易にこれを消滅させることが出來るであらうと言つてゐる。

かかる物の判つた考へ方をするものが、ロイ・ハワード以外にも、尙ほ多數に存在してゐることは、ワシントン・ポスト紙が、日米兩國ともに自重せよと說き、ボルチモア・サン紙が、アメリカは斷じて極東戰爭を挑發してはならないと述べてゐるのを見ても、容易にこれを看取することが出來るであらう。

從つて、公平に自國の政策を批判し、日米關係の惡化に對する責任は、當然アメリカの負ふべきものであるといつたやうな正論を吐くものも、決して絕無だとは言へない。

アメリカの下院外交委員ハミルトン・フイッシュのごときも、たしかにその代表的な一人で、彼はワシントン政府の極東政策を攻擊し、それは常にダイナマイトを裝塡してゐるから、いつ何ん時致命的な大爆發を惹き起すかも知れないと言ひ、且つルーズヴェルトの恐喝と怒號とは、日本をして不必要に獨伊兩國の懷中に飛び込ませたと斷じてゐる。日米關係の情僞に通ずること、さまで深くない彼でさへさうだから、親しく日米外交の樞機に參畫し、身を以て貴重な體驗を購うた元駐日大使キャッスルのごときが、無遠慮にルーズヴェルト大統領の對日外交を非難し、それを以て數人の狂信者の進言による誇大妄想的な干涉政策に外ならぬと極言するのも、決して理解の出來ないことではない。

誇大妄想的な干涉政策

米國史の新事例

劃期的な影響を與へる大事件

しかし、いづれにしたところで、日獨伊軍事協定の成立が、兎も角もアメリカの輿論と感情とを刺戟し、さなくとも惡化の一路を辿つてゐた日米關係に對し、重大な一轉機を劃したことは事實である。

それもそのはずで、日本がいよいよ意を決して獨伊兩國と相結び、互ひに手を取つて現下の世界的變局に處してゆくことになれば、それはひとり我が國の歷史的進展に對して劃期的な影響を與へる大事件であるばかりではない。暗にその三國同盟の對象として選ばれたアメリカの歷史においても、等しく劃期的

単なる言葉争ひの時期は過ぎた

な影響を與へる大事件である。

それに對するアメリカの出方如何によつては、富強世界に冠たるアメリカの國運そのものの上に、また如何なる變化を生ずるかも知れぬ。從つて、底の知れない自惚根性に魅入られたとでもいふか、徹頭徹尾無反省で、唯我獨尊で、強がり屋で、しかも正義人道の一手販賣元のやうな面をして、何事にも一言差出口をしなければ納まらないといふ厄介な性癖の持主であるアメリカも、このたび締結された軍事同盟の本質を理解し、それが現實に如何なる効果を以て自國の上に臨んでゐるかといふことを知れば、例のごとく心臓の強いところを發揮して、相變らず太平樂ばかりを並べ立ててゐるわけにはゆくまい。

善かれ悪かれ、三國同盟の成立は、アメリカに對して否應なく眞面目になることを要求した。

もはや單なる言葉争ひの時期は過ぎた。示威も、恫喝も、脅迫も、もはや何の役にも立たない。アメリカが依然として在來の態度を續け、僭越にも日獨伊三ケ國の進路を阻まうとすれば、そこにはもはや戦争以外の何物もないといふことを、彼は充分覺悟しなければならなくなつて來た。彼は今や考へ込むでゐる。そこにはえたいの知れない昂奮もあらう。我儘者の憤激もあらう。傷付けられた自負心を撫で擦つて、やや悔恨に似た感情も動いてゐるであらう。彼等は餘りにも甘く世間を見過ぎて來た。日本は何處までも石油と屑鐵とを欲しがつてゐる。だから、それを巧みに餌として利用さへすれば、日本はいつもそれに釣られ通しで、否でもアメリカの思ふ壺に嵌つて來るといつたやうな考へ方ほど、世にも單純至極なものはあるまい。

何といつても、アメリカは苦勞知らずのお坊ちやんだ。がつんと行き當つて、本當に眼から火の出るやうな思ひをして見なければ、この世の中が實際にどんなものか、一向御存知がないのである。

三國協定の條文だけ見ると、どこにもアメリカといふ文字は出て來ない。だが、その協定は明白にソヴィエット聯邦に何等の効果をも及ぼさないと斷

協定の内容が指示する第三國はアメリカ

大統領モンローの宣言

つてあるのだから、その協定の内容が指示する第三國なるものは、結局アメリカだといふことになつて來る。さすれば、日獨伊三ケ國の軍事同盟は、大體アメリカを對象として成立したといふことになるが、アメリカ建國以來の歴史において、それは果して如何なる意味を有つてであらうか。

數旬に互る選擧戰のあひだ、四六時中當選第一を祈念しながら、いかにして政敵ウィルキーを倒すべきかに苦慮し、ほとんど當面の職責を忘却してゐたかのごとき觀ある大統領ルーズヴェルトも、時として思ひをその點に致し、多少の感慨に耽つたことがないとは言へまい。

建國以來百六十年、アメリカは曾て他國を對象とする軍事同盟に參加したこともなければ、自國を對象とする軍事同盟を結成されたこともない。それは歴代の賢明な爲政者たちが、建國當時の精神を繼承し、それを最も具體的な基本政策の一つとして明示した大統領モンローの遺訓に忠實であつたため、いはばかくあるべくしてあつた當然の結果ではあるが、その動機および原因が、假令

どうあらうと、アメリカは、その點において、今まで尙處女性を有する唯一の國ともいふべきものであり、それはアメリカの歴史における最も大きな誇りの一つでもあつた。然るに、現在唯今のアメリカにおいてはどうであるか。舊世界の代表的指導勢力たる日獨伊の三大强國は、露骨にアメリカを對象とする軍事同盟を結成し、事と成行の如何によつては、敢てこれを敵とするも憚らないといふ決意を示してゐるのである。

アメリカ建國の精神は、アメリカをして今日の富强を致さしめた唯一の原因ではないにしても、その最も根本的な原因の一つではあつた。

かかる建國の精神は、一九一七年の大戰參加によつて、著しくその純眞性を喪つては來たが、それはまだある程度まで受動的な性質を有つてゐたから、アメリカが進んでそれを放棄したものだとは言へない點もあつた。然るに、支那事變およびポーランド戰爭勃發以後におけるアメリカは、その日獨兩國に對する態度および行動において、果して一九一七年のそれと同樣な性質を有つてゐ

ると言へるであらうか。アメリカ自體は、それらの事變または戰爭によつて、直接間接に何等の脅威をも受けてゐないのに、彼が、あるひは支那の抗日政權を援助し、あるひはヨーロッパのデモクラシー國家を擁護するのは、明かに大統領モンローの遺訓に反し、進んでその建國精神を放棄したものだといはなければならぬ。

日獨伊三ケ國の軍事同盟が、今や無慘にアメリカの處女性を蹂み躙り、その歷史が有する最も大きな誇りの一つを傷けたとしても、それはむしろアメリカ自身の自業自得ともいふべきもので、仰いで天に愬へる筋合ひもなければ、俯して地に喞つ因緣もない。

アメリカは、かくして兎も角もみづから選んだ冒險の第一歩を踏み出すことになつた。

冷嚴にして苛辣な現實は、彼がまだ苦勞知らずの坊ちやんであらうとなからうと、もはやさういふことにかかづらつてゐる餘裕はない。今後におけるアメ

リカの出方次第で、事態は當然その辿るべき道を辿るであらうし、運命は當然そのなすべき役割をなすであらう。

アメリカは今や明かに和戰の岐路に立つてゐる。進んで戰ふも戰はないのも、一にアメリカの執るべき態度如何によつて決するのだ。いかに唯我獨尊の强がり屋でも、さう無反省な所作ばかりを續けて、輕率にすべてを決定するといふわけにはゆくまい。大統領選擧戰が濟んで、都合よくルーズヴエルトが三選された今日でも、ワシントン政府が尙明白な態度を示さうとしないのは、むしろ當然だといはなければならぬ。

吾人の心の準備

今日までの情勢によつて察すると、一見强硬であるかのごとく見えるワシントン政府の內部においてさへ、やはり硬軟兩論が對立し、容易にその結論を見

アメリカの戰爭不介入

出すことが出來ないらしい。

殊に、昨年十月二十三日、大統領選擧戰の最高潮に達した當時、たまたまフィラデルフィヤの民主黨地方大會に臨んだルーズヴェルトが、眞正面から共和黨の選擧戰術を揶揄し、それを以て獨裁國の電擊戰を模倣したものだとこき卸した後、さらに語をついで、予はあくまでアメリカを外國間の戰爭に介入せしめないことを確約すると言明したことは、よし當面卽應の一時的方便であつたとしても、當然ある程度まで今後における、ワシントン政府の意嚮を拘束し、彼をして俄にその言明を裏切らしめないだけの効果はあるはずだから、その實大統領自身が强氣滿腹であり、且つアメリカ海軍の首腦部たちが、いづれも相率ゐて硬論の主張者ばかりだとしても、アメリカ政府をして、突如國民に對する公約を無視させ、直ちにおいそれと主戰的な行動に出でさせるやうなことはありえないであらう。

アメリカ國民の一般輿論としては、もとより參戰を歡迎してゐる形跡はない。

穩健なる論調

新聞は時として强いことを言ひ、政治家も間々硬論を吐くものもあるが、それはむしろ宣傳的な性質を帶びたもので、多く問題とするに値しない。勿論、大多數のアメリカ國民が、蔣介石および英國に同情を寄せ、何とかして彼等を救ひたいと思つてゐることは事實であり、それなるがゆゑに、彼等がかなり强く日獨伊の三ヶ國に對して反感を抱いてゐることも事實であるが、さりとて日獨伊の三ヶ國と戰つてまで、强ひて蔣介石や英國を援けたいと思つてゐるかどうかは、すこぶる疑問だといはなければならぬ。現に、アメリカの新聞紙中、比較的硬論の主張者たるニューヨーク・タイムス紙でさへ、最近非常に穩健な論調を示し、アメリカのなすべき第一の任務は、何よりも先づ英國を援助することだ、日本と戰端を開けば、當然自國の力を二分することになるから、アメリカの極東に對して執るべき態度の如何については、今一應深く考へなければならぬといつてゐるぐらゐだ。在來の行き掛りに囚はれることのすくない一般國民が、自國の平和と繁榮とを脅かす虞れのある戰爭の到來を歡迎してゐない

といふのは、毫も理解の出來にくい事柄ではない。

さうかといつて、如何なる樂天論者でも、今後の日米關係が俄に好轉し、それによつて戰爭の暗雲が一掃されるものだとは思へまい。

有名なボラーが死んで以來、アメリカにおける孤立主義の陣營は、頓に秋風落莫を極め、例のハイラム・ジョンソンや、ベネット・クラークなどの徒が、辛うじてその殘壘を死守してゐるやうな有樣だから、彼等の微力を以てしては、到底その强敵に當るだけの力はない。搗て加へて、ルーズヴェルトの主張する軍備擴張論乃至西半球共同防衛論は、日とともにアメリカ國民の志向を動かし、それはやがて、戰爭參加への道を開く一種のガイドたる役目を勤めつつあるから、さあいよいよといふ場合になつた時、果して何人が立つてこれを抑へ、いかにしてその參戰を喰ひ止めることが出來るであらうか。殷鑑遠からず、これを前の歐洲大戰の場合に徵して見ても、吾人はそこに多くの意義ある示唆を發見することが出來る。

殊に、國家と國家との戰爭は、單に利害の打算に基く合理主義の決論としてのみ起るものではない。個人の鬪爭と同樣、それは何かのはずみでも起るし、何かの行き掛りでも起る。過去の日米關係は、それらははずみや行き掛りを生ずるに充分な因緣を準備してゐるのみならず、現在および將來における日獨伊三ケ國とアメリカとの關係は、より一層それらのはずみや行き掛りを生ずるに充分な因緣を助長し易い傾向を有つてゐるから、アメリカが假令出來るだけ戰爭を避けようと思つてゐる場合でも、彼をして止むなく立つて戰はしめるやうなことが起らないとは言へぬ。

況んや、アメリカが全然精神の平靜を喪ひ、たやすくそれらのはずみや行き掛りに囚はれるやうな狀態にある場合には、アメリカは一層戰爭に對する誘惑を受け易いものだと思はなくてはならない。

アメリカは今やあたかも戰爭の前夜にでもあるかのやうな物々しい行動を續けてゐる。建艦促進とか、太平洋の防備强化とかいつた性質の放送は、ほとん

戰爭は到底避け得ないか

ど一日としてこれを聞かない日がないのみならず、あるひは極東の危機が切迫したとか、あるひはアメリカの緊急軍事會議が開かれたとかいつた種類の電報は、絶えず太平洋を越えてこちらに送られて來るのだから、ただ單にさういふ空氣だけを吸うてゐるものからいふと、戰爭は最早必然的なもので、到底これを避けることは出來ないのだとしか思へまい。

例へば、眞珠灣と、オアフ島のカネオへ港と、ミッドウエーとに石油貯藏所を增設するとか、ハワイの防備强化のために、現在の守備軍二萬四千名の上に、更にアメリカ陸軍第百五十四海岸砲兵聯隊およびカリフオルニア州護國軍高射砲聯隊の全員約一千名を、近くハワイに增駐するとか、アラスカの空軍基地フエアバンクスおよびアンカレージの兩飛行場を、更により一層强化するとか、セイヤー比島高等辨務官は、スミーリーおよびグルナートの兩海陸軍少將と協議の結果、今後の事態に卽應すべき諸般の準備を整へることになり、アメリカ本國からも、ミシガン州セルフリッヂの第十七追擊飛行部隊、およびカリフオルニア州ハミルトンの第三十五追擊飛行部隊各一個中隊が、近く比島に移駐される筈だとかいつたやうな報道は、それ自體が頗るセンセーショナルであるだけ、何人にも戰爭は極めて急速に近づきつつありとの感を與へるであらう。

極東在住アメリカ人の引揚

ひとりそればかりではない。三國同盟の成立が發表せられるや、アメリカ政府は、間もなく極東在住のアメリカ人に對して引揚の命令を下すし、支那駐屯のアメリカ陸戰隊千六百名も、何となく近く引揚げさうな氣配を示すし、ワシントン政府は、殊更に極東在住のアメリカ人を問題にし、その總數は一萬六千八百八十四名に上ると發表するし、ハワイの官憲は、日系米人の日本への渡行を禁止するし、さらにまた他方面では、アメリカ海軍省は、海軍豫備將兵三萬五千九十五名に對して召集令を發し、且つ豫備海軍士官二百名、および兵五千五百名に對し、來る十一月七日までにその所在地を通告すべしと發令するし、昨年十月十六日には、廿一歲から卅五歲までの男子千六百四十萬四千人に對して兵役登錄が行はれるし、メックス海軍長官は、第十九回の海軍記念日に當つ

多少ともその冷靜さを喪ふ場合

て海軍將兵を激勵するし、しかもその當日には、アメリカ海軍のお歴々が轡を並べて、種々自國海軍の強大を御吹聽に相成るといふ有樣だ。

現在におけるアメリカの狀態は、正に宣戰布告の第一歩手前にあるといつても、さして過言ではあるまい。

かやうに考へて來ると、アメリカが本當に戰爭の渦中に飛び込んで來るかどうかは疑問だとしても、若し何等かの異常な衝擊に出會はゞて、多少ともその冷靜さを喪ふやうな場合を生じて來ると、彼は必ずや反射的に起ち上つて、たちに吾人に對して武器を擬するやうなことになるであらう。

アメリカとの戰爭を必然だと感じ、それに對して吾人の當然爲すべきことをしてさへ置けば、今後たとへ如何なる事態の突發することがあらうと、吾人は毫も騷がず、驚かず、悠々とこれに應酬し、悠々とこれを處理することが出來る。現在の吾人にとつて必要なことは、徹頭徹尾萬一の事態に處する吾人の心の準備を整へて置くことである。

第三　眞の世界戰爭

戰端開始の形式

まづ最初に問題となるのは、假にアメリカが發狂して戰爭の渦中に投ずる肚を決め、いよいよその行動を起したといふ場合、その時の戰爭形態は、果してどうなるかといふことだ。戰場は東西の兩洋に亙り、アメリカの敵手は日獨伊の三ヶ國に別れてゐるから、問題の性質は複雜で、さう簡單にとやかく論斷することは出來ない。

もつとも明白に判つてゐるのは、樞軸國側から積極的にアメリカに對して戰爭を吹つかける虞れはないといふことだ。

忍耐には限度がある

樞軸國側は、アメリカとの戰爭を希望してもゐないし、アメリカから何物かを獲ようとする思惑も有つてゐない。蔣介石または英國に對するアメリカの援助も、せいぜい今までぐらゐな程度で、それ以上あまり立入つたことさへしなければ、出來るだけ戰爭の範圍を局限したいと考へてゐる樞軸國側は、ある程度までこれを大眼に見て、なるべく事を荒立てないやうにするであらう。

しかし、忍耐には限りがあり、物には程度といふものがある。假に露骨な戰爭的行動には出ないまでも、アメリカの蔣介石または英國に對する援助が、だんだん眼に餘るやうな程度にまで發展し、これ以上もはやアメリカの行動を默視しえないといふところまで來ると、いかに寛仁大度な樞軸國側でも、終に痛憤玉を破裂させて、積極的にアメリカにぶつつかつてゆくといふやうな場合が起らないとも言へぬ。

すると、假にアメリカと日獨伊三ヶ國とのあひだに戰爭が起るとすれば、それは大體においてアメリカがイニシアーチーヴをとつた場合だといふことになる。

戰爭の挑發者

アメリカは果して如何なる形式でイニシアーチーヴをとり、それによつて戰爭の渦中に投じようとするであらうか。もつとも普通の形式からいふと、直接武器を執つて樞軸國側を攻擊するといふ方法であるが、アメリカが若しさういふ方法を好まないものとすれば、アメリカは今少し間接的な手段をとり、能ふべくんば、みづから挑發者なりといふ汚名を避けようとするであらう。

その一つの手段は、すでに前節において說明した通り、英國または蔣介石に對する過度の援助であるが、かかる場合における樞軸國側の防衛行爲は、多く戰鬪的性質を帶びるから、それによつてアメリカは充分戰爭參加の目的を遂することが出來るのみならず、敢て詭辯を弄しさへすれば、戰爭の挑發者は樞軸國側のいづれかであつて、絕對に自分ではないと主張することも出來る。

アメリカの執るべき今一つの手段は、それ自身何等戰鬪行爲ではないにしても、その行爲を默過することが、相手方にとつて絕對に忍びえないやうな行爲

忍耐にも限度がある

樞軸國側は、アメリカとの戰爭を希望してもゐないし、アメリカから何物かを獲ようとする思惑も有つてゐない。蔣介石または英國に對するアメリカの援助も、せいぜい今までぐらゐな程度で、それ以上あまり立入つたことさへしなければ、出來るだけ戰爭の範圍を局限したいと考へてゐる樞軸國側は、ある程度までこれを大眼に見て、なるべく事を荒立てないやうにするであらう。

しかし、忍耐には限りがあり、物には程度といふものがある。假に露骨な戰爭的行動には出ないまでも、アメリカの蔣介石または英國に對する援助が、だんだん眼に餘るやうな程度にまで發展し、これ以上もはやアメリカの行動を默視しえないといふところまで來ると、いかに寛仁大度な樞軸國側でも、終に痛癪玉を破裂させて、積極的にアメリカにぶつかつてゆくといふやうな場合が起らないとも言へぬ。

すると、假にアメリカと日獨伊三ケ國とのあひだに戰爭が起るとすれば、それは大體においてアメリカがイニシアーチーヴをとつた場合だといふことになる。

アメリカは果して如何なる形式でイニシアーチーヴをとり、それによつて戰爭の渦中に投じようとするであらうか。もつとも普通の形式からいふと、直接武器を執つて樞軸國側を攻擊するといふ方法であるが、アメリカが若しさういふ方法を好まないものとすれば、アメリカは今少し間接的な手段をとり、能ふべくんば、みづから挑發者なりといふ汚名を避けようとするであらう。

その一つの手段は、すでに前節において說明した通り、英國または蔣介石に對する過度の援助であるが、かかる場合における樞軸國側の防衛行爲は、多く戰鬪的性質を帶びるから、それによつてアメリカは充分戰爭參加の目的を達することが出來るのみならず、敢て詭辯を弄しさへすれば、戰爭の挑發者は樞軸國側のいづれかであつて、絕對に自分ではないと主張することも出來る。

アメリカの執るべき今一つの手段は、それ自身何等戰鬪行爲ではないにしても、その行爲を默過することが、相手方にとつて絕對に忍びえないやうな行爲

を敢てすることによつて、否應なく相手方を戰爭に導くことだ。

古今の歷史を見ると、かかる方法を執ることは、むしろ戰爭開始の常套手段ともいふべきもので、決してその實例に乏しくない。比較的率直の美德を有するアメリカが、果してかかる常套手段をとるかどうかは判らないが、若しとらうと決心さへすれば、彼は幾らでもその方法を見出すであらう。何故なれば、樞軸國側は、日本といはず、イタリーといはず、ドイツといはず、いづれも皆自己の弱點を有つてゐるから、アメリカが卽時その弱點を衝くことの出來るやうな態勢をとることは、彼等の斷じて承認しえないところだ。

この點において、强大なアメリカ艦隊の動靜が、絕えず樞軸國側の注意を惹いてゐるのは、まことに止むをえないことである。

私はここにその一つの場合を擧げて見よう。世間周知のごとく、アメリカ海軍は、フイリツピンにマニラ灣と稱する一つの海軍根據地を有つてゐる。アメリカ艦隊の主力が、その海軍根據地に入らんとして、今眞珠灣を出港したとす

れば、この報道に接した日本海軍は、果して漫然これを默過してゐるかどうか。マニラ灣の代りに、それがシンガポールであり、またはそれがスラバヤであるとしても、事理に何等異るところはない。

アメリカ艦隊の行動そのものは、毫も戰鬪的性質を帶びたものでもないし、その行動自體が、ただちに我が國の利益または存立を脅威するものではないが、これを戰略的方面から考へると、アメリカ艦隊の主力が、進んで西太平洋の海面に移動し、マニラ灣、シンガポール、またはスラバヤの根據地に占據するといふことになると、それは明かに我が國の咽喉部に匕首を擬するものであり、我が國の有する卓越した戰略的價値の半ばを奪ひ去るものだ。從つて、その行動自體は、毫も戰鬪的性質を帶びず、且つただちに我が國の利益または存立を脅威するものでないにしても、我が國土の防衛に任ずる日本海軍としては、自己の職責上、到底これを默過してゐるわけにはゆかない。かかる事態を生じた曉には、必ずや立つてアメリカ艦隊を迎へ、實力によつてその行動を阻止せん

とするであらう。果して然らば、戰爭の勃發は、當然これを豫期しなければならぬ。

その點において、私が最近特に不可解に感じてゐることは、アメリカが、あるひは近くその艦隊をシンガポールに送るかも知れないといふ報道が、絶えず太平洋の彼方から傳はつて來ることだ。

デマ百出の時代であるから、さういふ根據不明の報道は、あまり眞面目にこれを受取らない方が賢明だとは思ふが、アメリカの艦隊らしい艦隊が、本當にシンガポールに來るといふやうなことがあれば、その時のアメリカ政府は、すでに日本との一戰を覺悟してゐるものだから、太平洋における戰爭の勃發は、まづ必然的なものと觀念する必要がある。和戰の岐路に迷うてゐる現在のアメリカとしては、まだそこまでの考へが出來てゐるはずはない。果せるかな、主戰論者の雄とも見做すべきノックス海軍長官は、昨年十月二十三日、往訪の新聞記者團に答へて、目下のところ、アメリカは、濠洲またはシンガポールに對

し、その艦隊を派遣する意向は有つてゐないといつてゐる。

いづれにしても、アメリカが本當に戰爭の渦中に飛び込んで、わざわざ一役買つて出ようといふ決意さへすれば、アメリカは直截簡明にその目的を達することも出來るし、廻りくどくその目的を達することも出來る。その時の御都合次第で、すこしもその手段の乏しきを憂へる必要はない。

想ひ起すと、前の歐洲大戰當時には、アメリカはただ戰爭に參加して、遠く二百萬の兵をヨーロッパの大陸に送つたといふだけのことで、本當に戰鬪らしい戰鬪といつては、サン・ミエールの附近で、すでに崩壞に瀕してゐたドイツ軍を襲ひ、これと小規模の一戰を交へたといふに過ぎない。しかもその御自慢の海軍に至つては、さらに陸軍よりも不作で、終始運送船の護衛と機雷の敷設とで日を暮したといふ有樣だから、實際にその力をテストして見る機會は有たなかつた。して見ると、常に力の意識に燃え、絶えずこれを試みようとする衝動に驅られてゐるアメリカとしては、今こそその希望を達する絶好の時期だか

世界的非常時の到來

ら、多少躊躇逡巡する場合はあつても、結局本能の命ずるところに從ひ、その去就を決するやうなことになるかも知れぬ。

戰爭の全面的形態

アメリカがいよいよ參戰した曉における戰爭の全面的形態は、文字通りの世界戰爭となつて、みづから戰爭に從事するものは勿論であるが、みづから戰爭に從事しないものまでも、直接間接に何等かの影響を蒙つて、いづれも平和時代における生活樣式を維持することが出來なくなり、一樣に非常時色をもつて塗り潰されることになるであらう。

かく言へば、別にアメリカの參戰を待たなくても、現在すでにさういふ狀態になつてゐるではないかといふ議論も出て來るであらう。假に現在すでにさういふ狀態になつてゐるにしても、その程度はますます深刻化して、いはば言說

航路のすべては即時その機能を喪失

を絕した狀態が現出して來るに相違ない。何故なれば、現在においては、まだある程度まで海上の交通は自由であり、就中、太平洋または印度洋においては、さして平和時代と異るところはない。サンフランシスコから横濱までの航路も、シドニーから香港までの航路も、マニラからボムベーまでの航路も、ほとんど何等の障碍をも蒙つてゐないが、ひとたびアメリカが參加した場合には、それらの航路といふ航路のすべては、即時その機能を喪うて、大西洋は勿論、太平洋および印度洋の海面は、まつたく全身不隨の麻痺狀態に陷るであらう。

早い話が貿易である。アジアおよびヨーロッパの戰爭は、それに對して多大の障碍を與へてゐることは事實であるとしても、まだ全面的に世界の貿易を窒息させるまでには至つてゐない。

日本の船舶は、依然として生糸をアメリカに送つてゐるし、アメリカの船舶は、依然として自動車をオーストラリアに送つてゐる。オーストラリアのスクオーターが、いまだその販路をカナダに求めることが出來、カナダの小麥商人

が、いまだその販路を英國に求めることが出來るとすれば、現在における世界の貿易は、たしかにその一部分を障碍されてゐるといふことは出來るが、いまだその全部を障碍されてゐるといふことは出來ない。

然るに、アメリカが一度立ち上つて、戰爭の渦中に飛び込んだとしたらどうか。世界の航路といふ航路は遮斷されて、大西洋は勿論、太平洋および印度洋の海面は、まつたく全身不隨の狀態に陷るであらう。その曉には、いかに利に聰い商人でも、もはやその硝石をアジアに送り、そのゴムをアメリカに送らうといふものはあるまい。假にさういふ物好きを敢てするものがあり、しかもたまたまそれに成功するものがあつたとしても、それは單に例外的な事實ともいふべきもので、それは到底全體的な形勢を動かすことは出來ない。

突如として世界の貿易が停つたとすれば、それは唯貿易が停つたといふことだけではすまない。貿易が停ると同時に、すぐ各國の國內狀態が一變して來る。ある國は食糧品の缺乏によつて困惑するであらう。ある國は產業の崩壞によつて恐慌に逢會するであらう。またある國は財政の破綻によつて革命の危機に瀕するであらう。その場合における各國は、みづから戰爭に從事してゐると否とを問はず、ひとしく同樣な苦惱の下に喘ぎ、ひとしく同樣な災厄の下に曝されて、多少程度の差こそあれ、いづれも皆戰爭の犧牲を負擔し、平等にその分け前を受け持つことになるに相違ない！

試みに、ブラヂルまたはアルゼンチンの場合を擧げて、その具體的な影響を考へて見ると、その實際は果してどうであるか。ブラヂルの珈琲輸出が止まつて、サン・パウロの埠頭が、まつたく閑人の魚釣り場となつたとし、アルゼンチンの羊毛輸出が止まつて、廣漠たるパンパスの落日が、ひとり茫々たる草原の上を輝かすやうになつたとしたら、その場合におけるブラヂルおよびアルゼンチンは、いかにしてその平和時における生活を持續することが出來よう。世界の強國が擧げて戰ふといふことは、畢竟世界そのものが戰ふといふことだ！

現在のアジアおよびヨーロッパにおいては、すでに一ケ年乃至三ケ年以上の

戰爭が繼續されてゐるが、それは各々別個の戰爭として勃發し、東西兩洋の戰爭のあひだには、ほとんど何等の關係もない。

從つて、それらの戰爭が及ぼす影響は、とかく局部的になり易いし、それが局部的である限りは、その影響によつて生ずる直接間接の打擊は、何といつても全世界的ではありえない。しかし、その戰爭にアメリカが介入し、今まで局部的であつた戰爭をして、今後全面的な戰爭だといふことにしたら、その及ぼす影響は、當然無制限に擴大されるはずだから、その影響によつて生ずる直接間接の打擊も、おのづから全世界的となるであらう。エッチ・ジー・ウエルスは、夙にこの點に着眼し、今後起るべき舊世界の戰爭に對して、アメリカが再びこれに參加するやうなことがあつたら、それこそ正眞正銘の世界戰爭だといつたことがあるが、彼はたしかに這般の消息を看破してゐたものだ。

浮薄な論者の中には、前の歐洲戰爭を指して、輕々しく世界戰爭と呼んでゐるものもあるが、それは決して當を得た見方だとは言へない。

何故なれば、彼等の見てゐるところは、ただ單に數字または外形であつて、その實質ではない。いたづらにそれに參加したと稱する國々の數や、その戰爭における外面的形式の仰々しさなどに驚くばかりで、全然その實際的な影響はこれを閑却し、すこしも戰爭そのものの本體を見究めようとしてゐない。その點からいふと、前の歐洲戰爭よりも、有名なモンゴリアン・インヴエーションの方が、はるかに世界戰爭らしい世界戰爭であつた。

歷史の教へるところによると、オノン河畔の遊牧民族が勃興して、有史以來の大帝國を建設した時代には、まだアメリカは發見されず、アフリカは暗黑の裡にあり、オーストラリアおよびその附近の島嶼は、全然原始のすがたを維持して、ひとり蠻族の天國たる狀態に遺棄されてゐた。當時の世界と稱すべきものは、わづかにアジアおよびヨーロッパの兩大陸を包含してゐたに過ぎない。しかも、成吉斯汗およびその子孫たちは、前者の四分の三および後者の三分の一を征服し、西はワールスタットから、東は博多灣に至るまで、北はモスコー

附近の森林から、南は中央ジャバの平原に至るまで、寒熱溫の三帶を通じ、すべてこれを戰場として戰つたのだから、蒙古特有の騎兵部隊が、怪奇な攻城具たる石弩石礮を携へて、あたかも疾風枯葉を捲くがごとく奔馳した舞臺は、ほとんど當時の世界全土に亙つて居り、完全にその災禍を免れたものは、わづかに西部ヨーロッパの數ケ國に過ぎなかつた。

これに較べると、前の歐洲戰爭は、戰場も大體中央ヨーロッパの平原に限られてゐたから、實際にその戰禍の及んだ範圍は、さまで宏汎な地域に亙つてゐなかつた。

災厄中の災厄

戰爭は本來災厄中の災厄だ。戰爭によつて災厄を蒙るのは當然で、その災厄を蒙らなかつたとか、または災厄の代りに利福を獲たとかいふのでは、本當に

歐洲戰爭當時の狀態

歐洲大戰と自餘の諸國

戰爭の影響を蒙つたものだとは言へない。

然るに、前の歐洲戰爭當時の狀態はどうであつたか。本當に戰爭に從事し、その戰爭の舞臺となつた西部または中部のヨーロッパ國民は、なるほどそれによつて非常な災厄を蒙り、中には殆んど言語に絕するやうな苦痛を嘗めたものもあつたが、それ以外の地域に屬する國民は、もとより大した災厄を蒙つたわけではなく、反つて戰爭の好影響を受け、むしろ戰爭樣々といつたやうな氣持を抱いてゐたものが多い。現に、我が國やアメリカなども、名實ともに立派な交戰國の一つで、それ相應な任務をも引き受け、現實に多大な犧牲をも拂つたのであるが、その實戰爭によつて損得したところを計量して見ると、二國はそのために非常な迷惑をしたとは言へないであらう。我が國やアメリカにしてそれだから、ただ名ばかりの交戰國で、戰場から遠く離れてゐた南米あたりの諸小國になると、戰爭は本來災厄中の災厄だといつたやうな心持は、全然これを經驗する機會が與へられなかつたかも知れない。

從つて、私は前の歐洲戰爭を指して、輕々しく世界戰爭などと呼ぶ論者を、私は頭から浮薄だと非難するのである。

ところが、今度の戰爭にアメリカが參加することによつて、現實に日獨伊三ヶ國對アメリカの戰爭が起つたとすれば、それは前の歐洲大戰などとは違ひ、本當に世界戰爭の表情を帶びて來て、世界の國民といふ國民は、徹骨徹髓まで戰爭は災厄中の災厄だといふことを痛感し、齳然として在來の浮薄な觀念を一掃するやうになるに相違ない。

貿易は停る。產業は崩壞する。食物は乏しくなる。饑餓は襲うて來る。秩序は破壞される。革命の危機は迫つて來る。觸目する限りの世界が、すべてかかる狀態になつたとしたら、みづから救ひ得る手段を有たない小弱國に、果して如何にしてこの窮地を脫しようとするか！

當面の交戰國自體が、かかる狀態になることは、素より自業自得ともいふべきもので、いまさら後悔する資格もないはずだが、アメリカの參戰によつて生

ずる世界戰爭は、當面の交戰國自體よりも、戰爭の圈外にある無辜の中立國に對して、より深刻な影響を及ぼすことが確實であるだけ、一層眼も當てられない局面を展開する場合があるかも知れぬ。

交戰國そのものは、何といつても富强國である。いよいよ苦しい立場に立つても、どうにかそれを凌ぎ切る手段を見出すことは出來るが、中立國の十中八九までは、いづれも小弱國であつて、充分に自分を護ることも出來なければ、進んで他に何物をも求めるだけの力もない。從つて、困れば困り放題、苦しめば苦しみ放題で、他から來つてこれを救ふものがない限り、自分ではどうすることも出來ない。結局は成るやうに成らせて置くより外に、他にこれといふ良手段は見つからないことになる。

現に、このたびのヨーロッパ戰爭の結果、ドイツ軍によつて占領せられた地域は、ノールウエーをはじめ、オランダや、ベルギーなども、一樣に食糧品の缺乏によつて困惑してゐる容子だが、さりとてドイツもこれをどうすることも出

來ず、それをただそのままの狀態でうつちやらかしてゐるらしい。北大西洋における英國艦隊の封鎖だけで、すでにそれだけのことが起つてゐるとしたら、世界の貿易路の全部が遮斷された曉には、果してどういふことが起るか！

かやうに考へて來ると、吾人は簡單にアメリカの參戰だなどといつてゐるが、本當にアメリカが參戰するといふことは、それこそ有史以來の大災厄をもたらすもので、この上もない人類の悲劇だといはなければならぬ。

ルーズヴエルト大統領をはじめ、ワシントン政府の高官たちは、眞劍にそこまで考へて見たことがあるだらうか。今日の世界は、個人の恣意や野心などによつて、さう好き勝手に處置されていいといふわけのものではない。底の知れない自惚れ根性に魅入られた結果、いかに無反省で、唯我獨尊で、强がり屋で、しかも正義人道の一手販賣元のやうな面をして、何事にも一言差出口をしなければ納まらないといふ厄介な性癖の持主であるアメリカ人であつても、多少ともその邊の事理を突込んで考へて見たら、まさか輕率にやつつけろといふ氣分

アメリカがなすべき當然の任務

アメリカは戰ふべき理由を有たず

にばかりなるわけにはゆくまい。

アメリカが本當に正義人道の一手販賣元であり、本當に何事にも一言差出口をするに値するだけの資格を有する大强國であるとしたら、この際のアメリカがなすべき當然の任務は、慌てふためいて戰爭の渦中に飛び込んだりすることよりも、他にもつと重要で、もつと有意義なことがありはしないか。

今やアメリカは重大な責任を負うてゐる。人類の歷史と文化とは、ぢつとアメリカの態度を睇め、彼が果して和戰いづれの道を執るかを注視してゐる。若しアメリカが戰意を放棄し、進んで世界の平和に貢獻しようといふ誠意を示すならば、彼は永久に人類の恩人として感謝されるであらう。若しアメリカが一時の激情に囚はれ、不用意に平和の破壞者として一身を處するやうなことがあれば、彼は永遠に人類の敵として咒詛されるであらう。

いかなる點から見ても、アメリカは絕對に戰はなければならん理由を有つてゐない。日獨伊の三ケ國は、未だ嘗つてアメリカを敵として取扱つたこともな

ければ、將來敵として取扱はうといふ氣持も有つてゐない。にも拘らず、アメリカが敢て戰爭の渦中に飛び込むとすれば、それはアメリカの好戰性によるものだ。アメリカの好戰性のために、世界を擧げて災厄の中に追ひ込まれるとすれば、アメリカが永遠に人類の敵として咒詛されるのも、また止むをえないことである。

第四　海洋の大史劇

地理的制限

現在唯今のところでは、大體戰爭は世界の三ヶ所において行はれてゐる。一つは支那における戰爭であつて、我が軍と抗日支那軍とは、蜿蜒數千キロに亙る長大な戰線において對峙し、そこでは今尙ほ活潑な戰鬪が行はれてゐるのみならず、我が果敢な海鷲部隊は、抗日支那に對する唯一の輸血路ともいふべき滇緬ルートを遮斷するために、最近海拔數千メートルに達する山岳地帶の上空を翔び、數次メコンおよびサルヴィン兩河の上流における幾多の橋梁を爆破してゐる。

戰爭は全面的な性質を有つてくる

然るに、地球の反對側においては、さらに英獨兩國間および伊希兩國間に戰爭が行はれ、一方ドイツの强力な空軍は、ほとんど連日連夜に亙つて英本國を襲ひ、首府ロンドン市は勿論、英國南部地方の平原は、ところとして爆彈の雨を浴びないところはないといふ有樣であり、他方アルバニアから出發したイタリー軍は、今や峨々たる北希の峻嶮を突破して、一路ヤニナおよびビクリスタの方向に進み、各所ですこぶる激烈な山嶽戰を交へてゐる。

ところが、これら三つの戰爭は、今まで孤立的に行はれ、そのあひだに何の聯絡もなかつた。

いよいよアメリカと日獨伊三ヶ國とのあひだに戰爭が勃發したとすれば、それと同時に、戰爭は全面的な性質を有つて來るから、今まで孤立的に行はれてゐた三つの戰爭も、もはや三つの戰爭ではなくなり、それは何れも單一戰爭の各局面を現はす部分的なものとなるであらう。

さすれば、アメリカの參戰は、ひとりアメリカといふ新しい交戰國を加へるのみならず、現在の日獨伊三ヶ國の敵をして、それぞれ日獨伊三ヶ國に共通する敵たらしめるから、必然的に英國およびギリシャが日本の敵となると同樣に、支那はドイツおよびイタリーの敵となり、戰爭そのものの具備する性格は、それによつて著しく複雜多樣なものになるであらう。ただこの一點だけから觀察しても、アメリカの參戰は、決して世界を幸福にするものではない。

しかし、アメリカの參戰によつて、戰爭そのものの具備する性格は、著しく複雜多樣なものになるとしても、それが著しく複雜多樣なものになるからといつて、なにも戰爭の方法または手段が、それに比例して複雜多樣なものになるといふわけではない。

戰爭の方法または手段

いかに富强世界に冠たるアメリカであらうと、やはり陸軍で戰ふか、海軍で戰ふか、または空軍で戰ふかする以外には、他に何も特別な戰ひ方はないのであるから、具體的に樞軸國對アメリカの戰爭を研究する場合においても、吾人は相變らず在來の角度からこれを觀察して、それに對する最も合理的な結論を

抽き出して來ればいい。このたびのドイツの戰爭でもそれで、世間では何かドイツが特別な戰ひ方でもやつてゐるかのやうに考へてゐる人もあるが、戰爭のロマンチシズムは、さう無暗に轉がつてゐるものではない。現在のドイツは、ただ正確に、ただ合理的に戰つてゐるのだと考ふべきである。

して見ると、日獨伊三ケ國とアメリカとの戰爭は、その性質が極度に惡性であるに拘らず、戰爭の方法または手段においては、むしろ豫想外に簡單なものではあるまいかと思ふ。

何故なれば、樞軸國側とアメリカとは、特別な地理的條件に制せられてゐるので、すべての戰爭方法または手段をもつて戰ふことは出來ない。從つて、この地理的條件に制せられない範圍内においてのみ、その方法または手段を用ひることが出來るのだから、いかに多種多樣な方法または手段を用ひようと思つても、それは頭から出來ない相談だといふことになる。さすれば、敢てそれを冒さうとする馬鹿者もないはずだし、假に敢てそれを冒さうとする馬鹿者があ

つたとしても、彼は結局慘憺たる失敗をもつて終ることは必定だから、ひとり自分自身が莫迦を見るばかりで、毫も相手方を脅威することは出來ない。相手方を脅威することの出來ない戰爭方法だとすれば、それが如何に奇想天外より來る方法であつても、それは絶對に有害無益な戰爭方法だといはなければならぬ。

日獨伊の三ケ國とアメリカとを制約する特別な地理的條件と言へば、どれほどさういふことに無關心な人間であつても、それが兩者を隔離する海洋の問題だといふことは、おのづから氣が付くに相違ない。

更めて世界地圖を開いて見るまでもなく、獨伊兩國とアメリカとのあひだには大西洋があり、日本とアメリカとのあひだには太平洋がある。國と國とのあひだに海洋の存在することが、いかに力强く戰略的情勢を支配するものであるかといふことは、せいぜい英國の歷史を見れば判ることで、何も特別な專門的知識を要することではない。

金城鐵壁に勝る力

ほとんどヨーロッパの全土を征服したナポレオンが、何ゆゑ英國のみを征服することが出來なかつたのか。わづか二百七十日のあひだに、四十五萬平方哩の地域と、人口七千萬の領土とを席捲したドイツが、何ゆゑ今尙ほ英國のみを持て餘してゐるのか。答へは至極簡單である。英國とヨーロッパとのあひだには、北海、ドーヴァー海峽、およびイングリッシュ・チャンネルの三つがあつて、永久に兩者を隔離してゐるからだ。

しかも、それらの海洋および海峽は、もつとも廣いところでも三百六十海里、もつとも狹いところでは二十六海里の幅員しか有つてゐない。にも拘らず、それは如何なる金城鐵壁にも勝る力をもつて英國を保護し、ナポレオンもこれを侵すことが出來なければ、ドイツもこれを侵すことが出來ず、依然として英國を難攻不落または難攻不落に近い地位に置いてゐる。

剛强無敵ともいふべき蒙古帝國が、我が國に對して失敗し、且つジャバに對してもその功を全くすることが出來なかつたのは、蒙古帝國とそれらの國々とのあひだに、東支那海および南支那海が介在してゐるために、これを陸上から攻擊することが出來なかつたからだ。もし兩者のあひだにそれらの海洋が介在してゐなかつたら、我が國はもつと酷い眼に會つてゐたであらうし、ジャバも多分征服されてゐたであらう。

大西洋の廣さ

宏大なる海洋

然るに、大西および太平の兩海洋は、そんなせせこましい海洋ではない！

ケベックからブレストまでは二千八百海里であるし、ブレストからニューヨークまでは三千海里である。一時間二十海里の速力を有する船舶に搭乘しても、百四十時間乃至百五十時間を費さない限り、北アメリカおよびヨーロッパのあひだを航行することは出來ないのだから、幅員わづか二十六海里のドーヴァー海峽に困惑するやうなことでは、頭から問題にも何にもならない。

太平洋の廣さ

太平洋に至つては、さらに一層それが甚しく、横濱からカナダのヴィクトリアに至る距離は四千二百海里、サンフランシスコから横濱に至る距離は四千五百海里、アメリカの前哨地點ともいふべきホノルルから横濱に至る距離でさへ、尚ほ三千四百海里弱あるといふ有様だ。從つて、その何れの航路を利用することにしても、日本と北アメリカとのあひだは、北アメリカとヨーロッパとのあひだよりも、はるかに遠く隔離してゐるといふことになる。

敵國の海軍を制壓し得る大海軍

かかる Remoteness が、樞軸國對アメリカの戰略情勢の上に及ぼす第一の影響は、交戰國相互に、原則としてその陸軍を用ひることが出來ないといふことだ。

何故なれば、交戰國の何れかが、強ひてその陸軍を用ひようと思ふなら、彼は壓倒的に敵國の海軍を制壓し得るだけの大海軍を保有するのみならず、一時に數十萬乃至數百萬の兵員を輸送し得るだけの大運送船隊を準備する必要がある。假令アメリカの富強をもつてしても、それは絶對に出來ない相談で、強ひてさういふ突飛なことをしようとすれば、アメリカは先づその道行において挫折して終ふであらう。

大陸軍の上陸

アメリカにとつて不可能なことは、勿論日獨伊の三ケ國にとつても不可能なことであるから、樞軸國側の陸軍が如何に強大であつても、百萬のドイツ軍がワシントン市を占領するとか、日本軍が潮のごとくオレゴン州の平野に殺到するとかいつたやうな事態は、萬々起り得る可能性はない。從つて、ホーマー・リーの空想や、フィールディング・エリオットの夢などは、それが空想であり夢である限りにおいて、一種の壯快な冒險小說であるといはなければならぬ。

さらにまた、假にさういふ大陸軍を敵國の海岸に送りえたとして考へて見よう。

その時敵は果してどうするか。おそらくは拱手してその大陸軍の上陸を座視してゐるものではあるまい。交戰國の双方は、その兵力資源において無盡藏だ。上陸軍に匹敵する以上の大陸軍を集中して、極力これが上陸を阻止するのみな

萬里遠征の大軍を維持することはできない

らず、あらゆる武器を聚め、あらゆる防禦施設を構築して、あはよくばこれを殲滅せんとするであらう。かかる防禦軍の抵抗を突破して、都合よく敵地に上陸することの如何に至難であるかは、古今の戰史が雄辯に物語るところで、なにも更めて説明する必要もあるまい。

ところが、問題は單にそればかりに止まらぬ。

僥倖にして敵前上陸が成功し、都合よく大軍を敵地に送ることが出來たとしても、いかにして自後の作戰を繼續するか。糧を敵地に求め、兵を隨所に徵して戰つたといふのは、萬事單純であつた時代の戰爭のことだ。作戰根據地たる本國と戰場とのあひだが、驚くなかれ！　二千八百海里以上も離れてゐるといふやうなことでは、到底萬里遠征の大軍を維持することは出來ない。兵器彈藥の補充はどうするか。兵員の輸送はどうするか。食糧の供給はどうするか。

私は嘗つて敵と自分とのあひだに餘程實力の相違がないかぎり、大體において長距離作戰は成功しないといつたことがある。

長距離作戰の失敗

これは海軍の戰爭においてもさうであるが、陸軍の戰爭においては一層さうだ。戰爭の魔法使ひだといはれたハンニバルでさへ、そのローマ遠征は成功しなかつた。戰爭の神樣ともいふべきナポレオンも、生涯において試みた二つの遠征は、先づエヂプトにおいて失敗し、次いでモスコーにおいて大失敗をした。晩年の豐太閤も、餘計な朝鮮征伐さへ思ひつかなかつたら、今少し幸福な環境において死ぬることが出來たであらう。

一握の植民地軍を持ちあぐんで、終にその獨立を許さなければならなくなつた英國は、本國から遠く離れて戰ふことが、いかに至難であるかを痛感したに相違ない。滿洲において戰つたロシア軍も、その本國をバイカル湖附近に有たなかつたことを、沁々痛恨した場合があつたであらう。歴山大王がインダス河まで攻め入つて失敗せず、拔都がヴォルガ江畔に占據して、その威令を行ひえたといふのは、むしろ例外中の例外ともいふべきもので、到底一般的な典據とはなりえない。

かくいふと、中には前の歐洲大戰におけるアメリカ軍の歐洲遠征を擧げて、その必ずしも至難にあらざる所以を說くものもないではあるまい。併し、これは全然事情が違つてゐる。第一に、當時の海上輸送路には、全然敵の海軍力が存在してゐなかつた。優勢な英國海軍に壓せられて、ドイツ海軍の主力は自國の根據地奥深く匿れ、ほとんど外洋に出擊する力を有つてゐなかつた。第二に、當時のアメリカ軍は、强大な抵抗力の存在する敵地に上陸したものではなく、自分の與國たるフランスまたは英國の安全な港灣に上陸して、靜かに大規模な戰鬪準備を整へ得る便宜を有つてゐた。第三に、アメリカがヨーロッパの戰場に送つた二百萬の兵員は、これを一時に全部送つたものではなく、その中五十萬は初めの十三ヶ月間に、殘餘の百五十萬は最後の六ヶ月間に、全兵力を通じて合計十九ヶ月間に送つたものである。

して見ると、一口にアメリカ軍の歐洲遠征などといつても、それは私がここでいふ遠距離作戰などとは違ひ、全然その本質を異にしたものであつた。

空軍使用の限界

次に、かかる Remoteness が、樞軸國對アメリカの戰略的情勢の上に及ぼす第二の影響は、交戰國相互に、原則としてその空軍を用ひることが出來ないといふことだ。

空軍流行の今日、私がかかる斷定を下すと、中には妙に考へる人もあらうが、私が特に原則としてと斷つてゐるのは、全然空軍が用をなさないといふ意味ではない、アメリカが樞軸國側を攻擊する場合でも、また樞軸國側がアメリカを攻擊する場合でも、これを主作戰的に常用することが出來ないといふ意味だ。現に、英本國を攻擊しつつあるドイツは、その陸軍を用ひることが出來ず、その海軍をも用ひることが出來ないため、止むなく空軍本位の戰爭をやり、ハインケルや、ユンカースや、メッサーシュミットなどは、毎日その猛威を振ひつ

つある。これは空軍が主作戰的に用ひられてゐる絶好の事例であるが、樞軸國對アメリカの戰爭では、相互の交戰國が如何に工夫して見ても、到底さういふ眞似は出來ないといふのである。

今日の飛行機が、ほとんど想像以上の發達を遂げ、日一日とその性能を增しつつあることは、私もこれを疑ふものではない。

近い將來において、それは遙かに陸海兩軍を凌ぎ、まつたく決定的な威力を有する武器となる時代が來るかも知れぬ。併し、現在唯今のところでは、まだそこまでは達してゐない。その最も大きな缺陷は、おのづから行動半徑が限局されてゐるために、その活動範圍が制限せられ、いくら遠距離のところであらうと、存分にこれを攻擊することが出來ないといふことだ。なるほどハーンド・バングボンは太平洋を橫斷し、リンドバークは大西洋を橫斷したが、それは特に選定された絶好のコンディションにおいて、ただ單に橫斷したといふだけのことだ。

重い爆彈を携へて敵地に進攻し、その目的を果して元の根據地に歸つて來る戰爭のためだといふことになれば、さう一々天候の具合を氣にしたり、無暗に自分の健康狀態を考へたりばかりはしてゐられない。ところが、現在唯今の飛行機では、遺憾ながら大西洋や太平洋などを橫斷して、縱橫無盡に敵地を爆擊して歸つて來るといふわけにはゆかぬ。そこに武器としての飛行機が有つてゐる最大の惱みがあるといつていい。

このたびの支那事變において、わが海鷲部隊は、隨分遠いところまで翔んでゐる。

最初の南京渡洋爆擊にしても、今の滇緬ルート爆擊にしても、決して近すぎるとは言へない。その中でも、特に敬服すべきものは、揚子江岸の安慶基地を翔び出して、遠く四川省の成都を爆擊したことだ。そのあひだを往復すると、すくなくとも三千キロはあるであらう。ずつと揚子江に沿うて西進しても、湖北の大平野を過ぎると、間もなく四川省境の大山岳地帶があり、一望見渡すか

イタリー空軍のバーレン島襲撃

ざり巍峨たる山塊が連亙してゐるのだから、その山塊の上に渦巻く悪氣流を突破して、首尾よく濃霧に鎖ぢ込められた成都平原の上空に出るのは、なかなか容易なことではない。それを見事にやつて退けた上、相當な戰術的効果を收めたとすれば、わが海鷲部隊の功績は、たしかに赫々たるものであるし、それだけの遠征に堪へ得る飛行機が出來てゐるとすれば、わが海軍機の發達も、決して悲觀するには當らない。

昨年十月二十日、ローマから來た電報は、イタリー空軍が、長驅ペルシア灣の上空に翔び、英國の保護領たるバーレン島を襲うて、そこに存在する貯油所をはじめ、送油管や精油所などを爆擊したといふことを報じた。バーレン島は、ペルシアの有名な石油產地であり、アメリカのスタンダードその他の會社が、その地において石油を精製してゐるので、英國海軍のアデン基地のごときも、多くはそこから燃料の供給を受けてゐるらしい。

イタリー政府の發表によると、これを爆擊したイタリー機は、空路四千五百

キロを翔破したといふのであるが、アメリカ方面で想像する通り、その出發地點が果して伊領東アフリカであるか、それともドテカネス群島であるかは判らない。いづれにしても、一氣に目的地まで往復したといふのではなく、特殊の裝置を有するサブマリン・タンカーを用ひ、約二十分間ぐらゐの時間を費して、それに中途で給油したといふのだから、なるほど距離は遠いに相違ないが、さまで驚くにも當らないやうだ。

現に英本土の空爆に忙殺されてゐるドイツは、七百五十キロ内外の距離をもつて、大體に爆擊機の有効行動半徑としてゐるやうである。

カレーからテームス河口までが約百キロ、オックスフォードを中心として南はワイト島、北はウォッシュ灣までが約二百五十キロ、北はハートルプールから、バークンヘッドを經て、南はブリマウスに至るまでが約五百キロ、西はノース・チャンネルに起つて、東はフアース・オブ・テーに終るところまでが約七百五十キロであるが、それが若しノールウエーのベルゲンを基地としたとすれ

佛白海岸占領の價値

ば、全有効行動半徑の七百五十キロを翔んでも、辛うじてスコットランドの北部を襲ひ得るだけであるし、ドイツ本國のウキルヘルムス・ハーフエンまたはクックス・ハーフエンからロンドンを襲ふことになれば、すくなくとも七百キロに近い行動半徑が必要だといふことになる。して見ると、ドイツがフランスおよびベルギーの海岸を攻略し、これを軍事上の基地として利用し得るといふことは、まつたく英國に致命的な打擊を與へたものだ。

以上の諸例によつても理解しえられるやうに、いかに飛行機が發達したからといつて、それが有効に活動しえられる範圍は、まださう大したものではない。幅員三千海里の大西洋を横斷したり、幅員四千五百海里の太平洋を翔び越えて互ひにその敵地の上に爆彈の雨を降らせるなどといふことは、假にイタリーが使用したといふサブマリン・タンカーのやうなものが、今後極度に發達を遂げた曉においてさへ、さう容易に出來ることだとは思はれない。

ドイツの人々は、英國の地圖の上に Es giebt kein Inseln mehr ! と特筆大

特別な地理的條件は克服の困難

書して欣んでゐるが、日獨伊三ケ國とアメリカとの關係は、ドイツと英國とのそれとは違ひ、今尙ほ相互に昔通りの離れ島であつて、それが如何に吾人にとつて不都合であらうと、その特別な地理的條件を克服することは、今のところ先づ不可能だと考へなければならぬ。

果して然らば、交戰狀態に置かれた樞軸國側とアメリカとは、相互に如何なる手段または方法をもつて戰はうとするか。

陸軍も役に立たない。空軍も用ひることが出來ぬ。あれもいけない、これもいけないでは、結局戰はずにゐるより外に道がないといふことになるが、アメリカも折角一戰を試みようといふ意氣込をして立ち上つた以上、萬更掛け聲ばかりしてゐるわけにもゆくまい。そこで問題になつて來るのが海軍だ。海軍さへ利用すれば、大西洋や太平洋が如何に廣からうと、それは何としてでもこなしてゆくことが出來る。ネルソン時代の海軍は、ただ食糧品さへ積んで置けば、今喧ましくいはれてゐる航續力などといふことは、あまり大した問題にはなら

強大な海軍を建設した理由

なかつた。今では軍艦にも矢張航續力といふものは大切で、さう無制限に勝手氣儘な眞似は出來ないが、元來が海上で活動するやうに出來てゐるのだから、それを有効適切に利用する能力さへあれば、多少海が廣いからといつて、それで役に立たなくなるといふものではない。

從つて、海軍さへあれば、陸軍の渡れない海を渡つて、飛行機の行けない遠方に行つて、そこで敵と一戰を交へることも出來れば、さらにそれ以外の何か違つた手段方法を講じることも出來る。四圍環海の島國が、我が國であれ、英國であれ、いづれも多額の國帑を費して、今日の強大な海軍を建設した所以は、まつたくその點にあるものだと思はなくてはならぬ。

ゲーリング元帥の言葉

第五　立役者日本

海軍中心の戰爭

それについて想ひ起すことは、昨年七月の末、ドイツのヘルマン・ゲーリング元帥が、新聞記者カール・フォン・ウイーガンドを引見していつた言葉だ。

彼は先づアメリカがドイツから攻撃を受けるであらうと思つて恐怖を感じてゐることを嗤ひ、それをもつてアメリカ人特有の妄想の現れに過ぎないと嘲つた後、ドイツがアメリカを攻撃するといふ考へは、すこぶる素晴らしい着想には相違ないが、今のドイツには、遺憾ながら爆彈を搭載してアメリカまで爆擊に出かけ、そしてまた歸つて來ることの出來るやうな飛行機はないと言ひ、さ

らに語をつづけて、唯一の可能性を有する手段は、ドイツが三千海里乃至三千五百海里の距離を突破し得る海軍をもつて、遠くアメリカを攻撃することだが、アメリカが今のやうな大海軍を有つてゐれば、それも全く滑稽な計畫に過ぎないといつた。

これらの言葉を玩味して見ると、私が前章において述べたことは、さらに一層はつきりして來るであらう。

かかる斷定は、それ自身自明な事實であるにしても、當然多くの疑問や誤解などを惹起する虞れがある。私は今一應海軍中心の意味を說明し、さらに前章において說き足りなかつた點を補足して置かう。

海軍を主作戰的に用ひるといふ意味は、何も陸軍や空軍などを用ひないといふ意味ではない。すでに說明したごとく、今のドイツは空軍を主作戰的に用ひてゐるが、その海軍も矢張活動を續けてゐる。ドイツのUボートは、大西洋の隨所を遊戈して、さかんに英國の港灣に出入する船舶を襲ひ、逆に英國を封鎖

してゐる。現に、英國の首相チャーチルは、昨年十一月五日、英國の下院において演說をしてゐるが、彼はその一節において或る種の告白を試み、ドイツの潛水艦は、ドイツの飛行機よりも怖ろしいと言つてゐる。ところが、現在貿易破壞に從事してゐるのは、ひとりUボートばかりではない、ドイツの袖珍戰艦グラーフ・シュペー級のものも、アゾーレス群島の北方海面附近をうろついて、やはりそれを遣つてゐるものと見え、ニューヨーク・タイムス紙の軍事專門家ハンソン・ボールドウインのごときは、特にその點を高調して、非常に英國の現狀を危ぶんでゐるぐらゐである。されればといつて、ドイツの對英攻擊の主作戰的方面は、必ずしもドイツの空軍だといふわけではなく、むしろその海軍だと斷言するわけにはゆくまい。

ドイツ自身に聞いて見ても、英國攻擊の戰法としては、やはり空軍に重きを置いてゐると答へるであらう。それはドイツの宣傳を見ても明かなことで、Weltluftmacht Deutschland の觀念は、一般的にドイツ人の頭腦を支配してゐる

ところだ。空軍こそドイツの運命を託するに足る武器であつて、英國もやがてその前にひれ伏すであらうといふところに、ドイツ人のすべての希望がかかつてゐるものと考へられる。試みに、ドイツ人のいふところを聞いて見よ。

彼はいふ。――今はただ指令の一下を待つのみ！　晝夜不問の英本土爆撃に、瞬一瞬英國の斷末魔は近づいて行く！

何といふ牢固たる自信であるか。かかる牢固たる自信は、これをUボートの活動によつても購ふことが出來まいし、袖珍戦艦の奮闘によつても得ることは出來まい。從つて、事實自體は、玆に海上作戦の方が有効であり、それによつて英國が現實に屈服するやうなことがあつても、ドイツの主作戦は空軍による攻撃であつて、潜水艦または水上艦艇による貿易破壊戦ではないといふことになるであらう。

アメリカとの戦爭の場合について見ても、空軍はそれ相應に重要な役割を演ずるに相違ない。

殊に、アメリカの貿易破壊を遣るやうな場合には、今の對英作戦と同樣、樞軸國側の飛行機は、それぞれ適當な基地を求めて、絶えずアメリカへの航路を監視し、多少でも乘じ得る機會さへ與へられれば、充分にその任務を盡すであらう。さらにより好都合な機會が與へられる場合には、ひとり貿易破壊にのみ止まらず、進んでアメリカの艦艇をも襲撃し、出來るだけ海軍の活動を扶けることにもなるであらう。

これはアメリカからいつても同樣で、その主要な作戦は海軍によつてこれを行ふにしても、アリューシャン群島の一つに據つたアメリカの飛行機は、それによつて我が國の北洋漁業を妨碍し、フイリツピン群島の何れかを基地としたそれは、我が南方航路を阻害すると同時に、しばしば臺灣または澎湖列島を空襲するであらう。さらにこれを大西洋方面において考へて見ても、アメリカが若しその海軍力によつてアゾレスまたはマデイラを占領した場合には、獨伊兩國の海上交通は、そこを基地とするアメリカの空軍によつて、多少ともその安

全を脅かされるであらうし、獨伊兩國の本土にしても、絶對に襲擊される虞れがないとは言へない。

それは空軍についての考へ方だが、さらに陸軍について考へて見ても、アメリカと樞軸國側との戰爭においては、絶對に陸軍に用がないとは言へない。用がないどころか、萬々一の場合を考へると、大いに陸軍の活動に期待しなければならんやうなことも起つて來るであらう。先づアメリカの側に立つて考へて見ると、前にいつたアゾレスまたはマデイラを占領するぐらゐなことは、せいぜい陸戰隊の二三千もゐれば結構であらうが、もし日本がフイリツピンを攻擊するやうなことが起つて來ると、もはや陸戰隊では間に合はない。大々的にフイリツピン駐屯の陸軍を用ひて、極力これを防禦しなければならないし、アメリカ自身マーシャル群島中の一島でも欲しいといふやうな場合には、强大な陸軍國たる日本の立場を考慮に容れると、それをひとり海軍の努力にのみ委ねておくといふわけにはゆくまい。

樞軸國側から考へても同樣で、アメリカが陸軍を用ひるところには、樞軸國側もやはり陸軍を用ひるのが本格だから、戰局の進展如何によつては、兩者ともに大いに陸軍の奮鬪に俟つことが多くなつて來るかも知れぬ。

古代のローマとカルタゴとの戰ひは、約一世紀近くもつづいた長期戰であつたが、その主作戰は大體海軍に委ねられてゐた。それといふのも、ローマとカルタゴとのあひだには地中海が介在し、しかもその當時の地理的觀念からいふと、シシリーのグラニトラ岬と、チユニスのボン岬とのあひだに存在する幅員七八十海里の海峽は、今の大西洋にも劣らないほどの大海だから、ローマとカルタゴとが戰ふためには、ぜひとも海軍の力を借りなければならないやうな戰略的情勢に置かれてゐた。從つて、第三ポエニ戰爭が終るまでには、數限りもない海戰が行はれてゐるが、陸戰らしい陸戰といつては、第二ポエニ戰爭におけるハンニバルの中部イタリーにおける野戰と、ザマの會戰と、それに最後のカルタゴ攻圍戰とが行はれてゐるだけだが、それでもやはり陸戰といふものは

行はれてゐて、しかも非常に重大な役目を務めてゐる。

して見ると、日獨伊三ケ國とアメリカとの戰爭が起れば、今の大西洋および太平洋は、さし當り古代の地中海たる立場に置かれ、それによつて現代のポエニ戰爭たる性格を賦與されることになるのだから、古代のポエニ戰爭に陸戰が行はれてゐるやうに、現代のポエニ戰爭にも陸戰が行はれたとしても、別に不思議なことではない。

日本は戰爭の主役となる

日本海軍の立場

私のいふごとく、樞軸國側とアメリカとの戰爭が、果して海軍を主作戰的に用ひる外はないとすれば、樞軸國の一翼たる日本は、當然アメリカとの戰爭の主役となり、全力を擧げてこれに當らなければならないことになるであらう。

それには略三つの理由があるが、その第一の理由は、ドイツおよびイタリーの海軍が、今强大な英國海軍に當つてゐるため、これを對アメリカ作戰に利用することが出來ないといふことだ。例のウキンストン・チャーチルは、依然として自國海軍の優越な地位を誇示し、地中海における我が海軍は、いつでもイタリー艦隊と雌雄を決する準備が整うてゐるといつてゐるが、それは必ずしも一場の駄法螺だとばかりは言へない。ドイツ空軍の猛烈な攻擊の下に置かれて居ながら、英國が兎も角その殘孽を死守することが出來てゐるのは、まつたくその强大な海軍が存在してゐるためで、その海軍さへ存在してゐなかつたら、もうよほどの以前において、英國はすでに沒落の悲運に際會してゐたに相違ない。

從つて、ひとり地中海といはず、北海といはず、北大西洋といはず、それが苟も自國の存立にとつて必須缺くべからざる海面であるかぎり、獨伊兩國の海軍に對して、英國は今尙ほ相對的優勢を持し、辛うじてヨーロッパの海上王たる面目を維持してゐる。

現在の英國が有する海軍力は、主力艦十四隻・四十四萬五千五百五十噸、航空母艦六隻・十一萬五千三百五十噸、甲級巡洋艦十五隻・十四萬五千六百二十噸、乙級巡洋艦五十二隻・三十二萬九千十五噸、驅逐艦百六十八隻・二十二萬八千六百九十四噸、潛水艦四十八隻・四萬九千四十噸で、總計三百三隻・百三十一萬三千二百六十九噸に上つてゐる。

これに對する獨伊兩國が有する海軍力は、ドイツが主力艦五隻・十萬七千噸、甲級巡洋艦二隻・二萬噸、乙級巡洋艦四隻・二萬三千四百噸、驅逐艦約十八隻・三萬噸、潛水艦約百隻・四萬五千噸で、總計約百二十九隻・約二十二萬五千四百噸であり、イタリーが主力艦六隻・十六萬四千四百八十八噸、甲級巡洋艦八隻・七萬九千二百三十二噸、乙級巡洋艦十三隻・七萬五千九百十二噸、驅逐艦五十九隻・八萬三千二百十八噸、潛水艦百五隻・七萬九千七百二十三噸で、總計百九十一隻・四十八萬二千五百七十三噸であるから、獨伊兩國の海軍力を合算すると、約三百二十隻・約七十萬七千九百七十三噸といふことになる。

して見ると、英國海軍對獨伊兩國海軍の勢力比は、英國の三百三隻・百三十一萬三千二百六十九噸に對し、獨伊兩國の約三百二十隻・約七十萬七千九百七十三噸といふことになり、その隻數においては稍後者が勝つてゐるが、その噸數においては前者の十割に對する後者の約五割三分強であつて、後者は未だ前者の半分ぐらゐな勢力しか有つてゐない。

しかし、嚴密に云ふと、かかる艦隊勢力の比率は、必ずしも正確なものだとは斷言致しかねる。なぜなれば、英國の諸艦艇などの中には、今日までに公表されてゐるもの以外に、相當喪失した艦艇もあることだと思はれるが、彼は絶對にそれを祕密の裡に包んで發表しないから、本當に蓋を開けて見ると、どんな意外なことが起つてゐないとも言へぬ。

現に、ドイツのノールウェー作戰當時のごときも、ドイツの發表した英國海軍の損害狀況は、主力艦一隻、巡洋艦六隻、驅逐艦五隻、潛水艦二十隻、運送船十一隻、合計四十三隻が沈沒したといふことであるのに、英國の發表したそ

れは、巡洋艦一隻、驅逐艦五隻、潛水艦三隻、その他の艦船五隻、合計十四隻が沈沒したといふことになつてゐる。これに反して、ドイツ海軍の損害狀況はドイツの發表によると、ただ巡洋艦二隻といふことになつてゐるが、英國の發表によると、巡洋艦四隻、驅逐艦十一隻、潛水艦五隻、運送船二十六隻、合計四十六隻といふことになつてゐて、その何れが本當であるか判らない。すべてがかういふ狀況であるから、吾人は果して英獨何れを信じたらいいか、いつもその判斷に迷はないわけにゆかない。

昨年四月九日のナルヴィツク海戰の結果などもそれで、英國海軍省の發表による戰報など見ると、ウエスト・フィヨルド内で沈沒したドイツの驅逐艦は、相當多數に上るやうに公表されてゐるが、ドイツではそれほど大した損害を受けたとは言つてゐない。イタリーでも、最近驅逐艦フランチエスコ・ヌロが、紅海で大損害を受け、止むなく自爆したといふことを公表してゐるが、すべてがすべてさうではなく、中には隨分公表されてゐないものもあるらしい。ドイツ

の發表によると、英國の主力戰艦ネルソンなども、英軍がフランダースから撤退した當時、ダンケルク附近の海面において、ドイツ空軍のために、綺麗に擊沈されてゐるはずだが、それも今尙ほ眞僞不明の狀態に置かれてゐる。

從つて、最近問題になつてゐる英國空軍のオトラント軍港爆擊に關する英伊兩國の論爭なども、昨年七月上旬の英伊海空戰におけるフッド以下主力艦三隻の大損傷問題と同樣、結局は當事者間の水掛論に終り、ここ當分は、誰もその眞實を知る機會は與へられないであらう。

殊にドイツの保有する潛水艦の現勢力に至つては、たしかに神祕中の神祕といふべきもので、到底それを外界から覗知することは出來ない。

英國のウキンストン・チャーチルは、一九三九年中にドイツの喪失した潛水艦は、約三十五隻の多數に上るから、戰爭開始後に竣工したと思はれる約十隻を加算しても、ドイツが有する潛水艦の現勢力は、せいぜい四十四五隻のものに過ぎないといふのであるが、ドイツ自身にいはせると、頭からその喪失數を

認めないのみならず、最近のドイツは、確かに一日一艦の割合で潜水艦を建造してゐるといふのだから、英獨双方の言分のあひだには、隨分大きな相違が存在してゐる。

前の歐洲大戰當時のことを追想して見ると、ドイツが全戰役中にゲルマニア造船所その他に建造命令を下した潜水艦の數は、總計七百七十餘隻に上り、その中約三分の一は竣工したといふのだから、それを標準として考へて見ても、チャーチルの十隻といふ想像は、あまりにも少な過ぎはしないであらうか。これを要するに、英國海軍對獨伊兩國海軍の現有勢力の比率は、先づその邊のところだらうといふ荒見當をつけたものに過ぎないから、あまり眞面目にそれを信憑して貰ふことは、むしろ私の豫期してゐないところである。

試みに、今度の戰爭が始まつてから以來、前記の三ヶ國が喪失した艦艇數を、その公表または公表に准ずべき報道に基いて、さる權威ある筋が調査した結果をいつて見ると、昨年九月三十日までの現在で、英國は主力艦一隻・二萬九千百

五十噸、航空母艦二隻・四萬五千噸、巡洋艦三隻・一萬八千二十噸、驅逐艦三十一隻・四萬二千二十噸、潜水艦十八隻・二萬二百九十九噸で、合計五十五隻・十五萬四千四百八十九噸に上り、イタリーは巡洋艦一隻・五千六十九噸、驅逐艦三隻・約三千噸、潜水艦十隻・噸數不明で、合計十四隻・噸數不明であり、ドイツは主力艦一隻・一萬噸、巡洋艦三隻・二萬二千噸、驅逐艦約十二隻・噸數不明、潜水艦隻數噸數ともに不明だといふのである。

米國海軍の標的

さらに、日本がアメリカとの戰爭の主役となり、全力を擧げてこれに當らなければならないといふ第二の理由は、アメリカ自身が主として日本を標的とし、これに對して強大な海軍力を差向けて來る關係上、日本は止むなくさういふ立場を執らなければならなくなるといふことだ。何故なれば、獨伊兩國の海軍に

對しては、その二倍もの勢力を有する英國海軍が、現にそれに對抗して活動してゐるのみならず、今後も矢張さういふ狀態を持續すべき立場に置かれてゐるはずだから、アメリカは何もその海軍の主力を、差當つてヨーロッパの方に差向けなければならん必要はない。

アメリカは最近勢力微弱なヨーロッパ艦隊を廢止した代りに、新らしく大西洋警備艦隊なるものを編成し、現に大西洋にある老朽戰艦ニューヨーク、テキサス、アーカンソーの外に、半ば武裝を解除されてゐる老戰艦ワイオミング、および航空母艦ウォスプ、レンジャーをもこれに加へ、さらに前大戰當時に建造された驅逐艦數隻と、最近建造された新鋭巡洋艦および潛水艦若干隻とをこれに編入し、その艦艇總數百五十隻から成る新艦隊を大西洋に常備することになつた。

アメリカの眞意からいふと、先づそれぐらゐなものを大西洋に常備さへしておけば、別に大した懸念はないといふのであらう。さすれば、戰時におけるア

メリカ海軍は、必然的に日本艦隊に對抗することになるから、みづから好むと好まざるとに拘らず、日本はぜひとも樞軸國側の對米作戰における主役を勤め、その重大な任務を負擔することになるに相違ない。

また、アメリカの防禦的な立場からいつても、大西洋における獨伊兩國海軍に對しては、すでに強大な英國艦隊が存在して、これに對抗することになつて居り、しかも艦艇總數百五十隻から成る大西洋警備艦隊がこれに加はることになれば、大西洋方面におけるアメリカの防備は、それをもつて先づ充分だといつていいことになる。

反對に太平洋方面においては、強大な日本艦隊が存在してゐるのに、それに對抗する如何なる艦隊も存在してゐないといふ狀況であるから、アメリカはぜひともその方面に艦隊の主力を配備し、絕えずこれに當らなければならない。尤も、以前からアメリカのアジア艦隊なるものもあるし、英國の支那艦隊なるものもあるが、前者は甲級巡洋艦ヒューストンを旗艦とし、七千噸の舊式巡洋

艦一隻、十二隻の老朽驅逐艦、十二隻の潜水艦、および數隻の小型補助艦から成るもので、現にハート提督によつて率ゐられる勢力微弱なものであるし、後者も以前はノーブル大將統督の下に、航空母艦一隻、巡洋艦五隻、潜水艦十五隻、驅逐艦十隻、スループ五隻、その他各種艦艇十一二隻ぐらゐから成る小艦隊であつたが、それも今では大半地中海以西の海面に召還されて、いづれも本國方面の作戰に當つてゐるから、今でははつきりした數字は判らないが、これまた勢力極めて微弱なもので、假に兩者相合して當つて來ることがあつても、それはほとんど問題になる性質のものではない。

從つて、アメリカがいよ〳〵樞軸國側と一戰交へようといふことになれば、現在太平洋に常備されてゐる合衆國艦隊の主力は、絶對に他の方面にこれを移動することは出來なくなつて來る。日本と軍事同盟を締結した獨伊兩國としては、それが最も大切な覘ひどころで、それあればこそ、彼等も欣んで我が國と手を握ることになつたのだ。

日本がアメリカとの戰爭の主役となり、全力を擧げてこれに當らなければならないといふ最後の理由は、さらに別個の意味においても存在してゐる。それは外でもない。アメリカ本國の大西洋沿岸には、アメリカの心臟部ともいふべき大都市があり、且つ産業的にもこれを輕視しえない多くの事情があるが、大西洋そのものの海面からいふと、ヨーロッパに對する交通を確保すること以外には、別にこれといふほど大して重要な點はない。從つて、前記の警備艦隊以外に、最近英國から獲得したニューフアウンドランド、バーミユーダ島以下、カリビア海における諸根據地でも强化して、そこに然るべき空軍または艦艇でも配備して置けば、それでさほどの不安はない。

それが一度太平洋の海面になると、そこにはアメリカの領土たる布哇もあれば、フイリッピンもあり、アメリカの領土に准ずべき英國の領土もあるといふ次第だから、さうあつさりと安心してゐるわけにはゆかない。現に、ノックス海軍長官は、最近にも太平洋におけるアメリカの領土について言及し、そこに

香港とシンガポール

苟くも星條旗が飜つてゐる以上、吾人はぜひともこれを確保する必要があると絶叫してゐるが、これを實際に保護防衛しようとすれば、可能不可能は兎も角として、さし當りアメリカ艦隊の主力を太平洋に置く必要がある。

言ひ換へると、アメリカと戰ふ場合の日本は、太平洋において數多の攻擊目標を有つてゐるから、これに對抗するアメリカ艦隊の勢力が劣弱であると、フイリツピンは勿論、時と場合には布哇を攻擊する場合もあり得るわけであるし、戰略的に何かの必要が起れば、長驅南下してツツイラを襲ふ場合もあらうし、逆に北上してキスカまたはウラナスカに薄る場合もあらう。

殊に況んや、それが英國所屬の領土になつて來ると、そこには香港あり、英領ボルネオあり、マレー半島あり、シンガポールがあるといふわけだから、たとへそれを救ふことはむづかしいとしても、それを全然開け放しにして置いて、一に日本艦隊の欲するままに委せて置くといふのは、强國として如何にも智慧のない遣り方だから、役に立つ立たないは別として、そこに日本艦隊に對抗し

蘭領東印度諸島の庇護

得る艦隊を置き、それとなく睨みを利かすことは必要であらう。

南北アメリカの交通を確保する上からも同樣で、都合よく戰時における兩大陸の聯絡を維持しようとすれば、單にチリーやペルーなどと共同防衛を議し、メキシコ以南の太平洋沿岸に、すらりと飛行機や艦艇などの基地を並べ立てたといふだけでは、到底まさかの場合の役に立つものではない。

アメリカの基本戰略からいつても、日獨伊の三ケ國と戰はんとするに當つては、獨伊兩國を英國に一任して置き、自分はまづ全力を擧げて海上の强敵たる日本に當り、一方では太平洋における英米側の利益を擁護しながら、他方では機をえて日本艦隊を擊破し、進んでその本土に薄るといふ作戰をとつた方が、いかほど實際に適合する戰法であるかも知れないし、またいかほど合理的な戰法であるかも知れない。殊に、アメリカの心持の中には、ひとり英米兩國の領土のみならず、あはよくば蘭領東印度の諸島嶼をもこれを庇護し、なるべく日本に對して諸種の重要な資源、例へば石油や、ゴムや、錫や、砂糖などを渡し

たくないといふ肚がある。

果して然らば、アメリカは大西洋を出來るだけ現狀維持の程度に止め、そのゴライアスの力の全部を傾けて、これを太平洋に集中し、極力日本に當らんとする戰法を採るに相違ない。さすれば、一方においては日本の南方航路を攪亂し得る利益があるのみならず、他方においてはその對支作戰を牽制し、それによつて日本の疲弊を促進し得る利益があるから、一擧兩得といふか、それとも一擧三得といふか、これ以上有効適切な戰法はないといふことになる。

かやうに考へて來ると、日獨伊三ケ國對アメリカの戰爭は、卽日本對アメリカの戰爭になるといふ決論が出て來る。現在唯今の情勢からいふと、それは萬止むをえざることで、吾人もそれに就いては今から充分肚を決めて置かなければなるまい。

想起すれば、アメリカ護國軍の將官ホーマー・リーが、はじめて一書を著して日米兩國の必戰を說き、彼獨特の奔放自在な空想を驅使して、縱橱にその傳

奇的な戰爭の場面を描破してからは、すでに三十一ケ年の歲月を經過してゐる。自後、日米兩國間には、絕えずその和親を阻害する幾多の難問題が發生し、それとともに日一日と兩國の武力的衝突を想像するものが多くなり、國家自體も止むなくそれを目標として武裝する狀態になつて來た。しかも今尙ほ實際の戰爭といふものは起らず、辛うじてその平和を保つて來た。

しかるに、支那事變および英獨戰爭の結果は、延いて日獨伊三ケ國の軍事同盟を結成せしめ、その軍事同盟を結成した結果は、必ずしも、アメリカとの戰爭を回避しえない形勢を促進するに至つた。事ここに至つた以上、吾人は欣んでその難局に當り、天の吾人に命ずるところが、假令いかなる大任であらうと、吾人は進んでこれを果すだけの覺悟をしなければならぬ。

第六　日米兩國海軍

日米海軍の現勢

日獨伊三ケ國とアメリカとの戰爭が、その地理的關係に制せられる結果、必然的に海軍本位の戰爭となり、從つてそれがまた日本中心の戰爭となる傾向が強いとすれば、その戰爭の實體及び形式について考へる場合には、先づ何物よりも兩國海軍の現勢を知り、それを基礎としてすべてを考究しなければならぬ。

アメリカの兩洋艦隊

アメリカ海軍は、いはゆる兩洋艦隊（two Hemisphere Fleet）を完成するといふ意氣込で、最近引きつづいて尨大な建艦計畫を立て、それは第一次ヴインソン案、第二次ヴインソン案、第三次ヴインソン案、またはスターク案などの名

日米兩國海軍の主力艦の勢力比

をもつて呼ばれ、目下着々としてその實現を計つてゐる。しかし、それはまだ大部分將來に屬することで、現在唯今のところでは、なるほど優勢は優勢に相違ないが、さう壓倒的に優勢で到底寄りつけないといつたやうなものではない。

まづ主力艦について見ると、アメリカは十五隻・四十六萬四千三百噸の勢力を保持してゐる。これに對して我が國には、九隻・二十七萬二千七十噸の勢力しかないから、隻數において六隻、噸數において十九萬二千二百三十噸の劣勢にあるが、アメリカの主力艦には、最近大西洋警備艦隊に編入された老朽戰艦アーカンソー以下三隻があり、それは將來においても太平洋には出て來ないものと考へられるから、それによつて三隻・八萬一百噸といふものが差引されて來る。すると、日米兩國海軍の主力艦の勢力比は、事實上日本の九隻・二十七萬二千七十噸に對して、アメリカの十二隻・三十八萬四千二百噸といふことになり、隻數における勢力比は、アメリカの一〇に對する日本の七・五〇、噸數における勢力比は、アメリカの一〇に對する日本の七・〇八强といふことにな

航空母艦の勢力比

るから、兩者を平均すると、大體アメリカの一〇に對する日本の七・三といふことになる。

航空母艦においては、アメリカは六隻・十三萬五千噸の勢力を保持してゐるが、我が國も矢張六隻・八萬八千四百七十噸の勢力を保持してゐる。隻數比においては一〇對一〇であるが、噸數比においては六・五五强で、約三・四五弱の劣勢である。ところが、アメリカの航空母艦中、一萬四千五百噸のレンジャーと、一萬四千七百噸のウォスプとは、何れも大西洋警備艦隊に所屬することとなつたから、これらを太平洋における艦隊勢力から控除すると、アメリカの航空母艦の勢力は、結局四隻・十萬五千八百噸となり、隻數においては日本が二隻の優勢となり、噸數においてはアメリカが一萬七千三百三十噸だけ優勢となる勘定で、これを噸數上の比率から見ると、アメリカの一〇に對する日本の八・四四强といふことになるから、全體の上から見て、別に大して劣勢だといふわけではない。

甲級巡洋艦の勢力比

甲級巡洋艦においては、アメリカは十八隻・十七萬一千二百噸の勢力を保持し、日本は十二隻・十萬七千八百噸の勢力を保持してゐる。アメリカの排水量は不揃ひで、一萬噸のウイチタ一隻以外の艦は、いづれも九千噸以上、一萬噸未滿で、大體排水量は區々であるが、我が國の艦は、七千百噸の加古級四隻、一萬噸の妙高級四隻、九千八百五十噸の高雄級四隻といふ風に區分されてゐる。隻數においては六隻、噸數においては六萬三千四百噸だけアメリカの方が優勢であり、その隻數上の比率は、アメリカの一〇に對する日本の七・五〇、その噸數上の比率は、アメリカの一〇に對する日本の六・三〇弱であるから、その全勢力の比率は、まづアメリカの一〇に對する日本の七ぐらゐに見て置けばいいであらう。

ところが、このたび編成された大西洋警備艦隊にも、やはり最近竣工した新鋭巡洋艦若干隻を加へるといつてゐるが、それが果して甲級巡洋艦の何れをかでも意味するものか、それとも乙級巡洋艦の最新艦ヘレナまたはセント・ルイ

ズでも意味するものであるか、そこはまだよく判つて居らない。いづれにしたところで、全體の勢力比の上に、さう大した影響を與へるものだとは思へない。

殘る乙級巡洋艦においては、アメリカも最近素晴らしくその勢力を增加し、ほとんど往年の面目を一新したかのごとき觀がある。以前にはオマハ級七千五十噸の艦が十隻あり、それを虎の子のやうにして大切がつてゐたものだが、今では續々新鋭艦が竣工し、隻數十九隻・十五萬九千二十五噸といふ大勢力を擁してゐる。だが、それだけ馬力を掛けて拵らへて見ても、有名な巡洋艦國の我が國に較べると、まだ大したことはなく、その隻數においては六隻の劣勢にあり、その噸數においてのみ、辛うじて一萬七千七百七十噸の優勢にある。

しかも日本のそれは一昨年九月三十日の調査であつて、それ以後に續々進水した艦の中には、五千八百噸の鹿島をはじめ、石垣や、宇治や、香椎などが、目下艤裝を急ぎつつあるはずだから、日米兩國海軍の乙級巡洋艦の勢力比においては、いくら謙遜して考へて見ても、アメリカの一〇に對する日本の一〇であつて、多少ともこちらに都合よく計算すると、あるひはアメリカの一〇に對する日本の一一といつたやうなことになるかも知れぬ。

アメリカは豫てから驅逐艦國として有名であつた。

しかもそれはさして立派な驅逐艦國として有名であつたわけではなく、あまり立派ならざる驅逐艦國として有名であつた。極く最近まで、その總勢力は二百二十四隻・二十八萬四千一百六十噸といふ尨大な數字を示してゐたが、そのうち五十隻を割いて英國に讓渡したから、現在唯今の勢力は、多分百七十幾隻・二十一萬數千噸といつた程度のものであらう。

これに對して、我が國は一等驅逐艦八十五隻・十二萬一千四百二十三噸の外、さらに二等驅逐艦二十九隻・二萬二千六百三十五噸の勢力を擁してゐるから、これを通計すると、その總勢力は百十四隻・十四萬四千五十八噸といふことになり、その隻數比は、アメリカの一〇に對する日本の約六・七〇强であり、その噸數比は、アメリカの一〇に對する日本の約六・八六强である。

ところが、これまた乙級巡洋艦の場合と同様、日本の調査は一昨年九月三十日の現在であるから、その後進水した萩風をはじめ、野分や嵐などを加へると、實質上の勢力比は、まづアメリカの一〇に對する日本の七ぐらゐに見るべきものであらう。殊に、それらの現有勢力の中から、アメリカはその若干を割いて大西洋警備艦隊の方に廻すといつてゐるから、日米總勢力の比率は、ますます日本の方に有利になつて來るものだと思はなければならぬ。

最後に潜水艦であるが、アメリカも最近はよほどその方に力瘤を入れ、ナルソールとかナウチラスとかいつたやうな大型な艦も造つてゐて、その總勢力は、決して侮ることが出來ない。昨年九月三十日の調査では、隻數百一隻・十萬六百五噸といふことであるが、それに對する我が國の方では、一等潜水艦三十六隻・五萬七千十九噸と、二等潜水艦二十五隻・二萬一千六百二十七噸と、それに最近進水した伊號第二十五、伊號第二十七、伊號第二十九の三隻があるから、總勢力六十四隻・約八萬三千噸程度のものと見れば大差あるまい。

さすれば、日米兩國の保有する潜水艦勢力比は、隻數においてアメリカの一〇に對する日本の約六・三三强、噸數においてアメリカの一〇に對する日本の約八・二六强であるから、兩者を平均して、アメリカの一〇に對する日本の七・三〇ぐらゐだと思へばいいであらう。しかも、アメリカの保有する潜水艦の中から、さらに大西洋警備艦隊の方に拔かれるものが若干あるとすれば、太平洋におけるアメリカの潜水艦勢力は、當然それだけのものが減少するはずだから、我が國にとつてはますます好都合になつて來る。

日米海軍の全勢力比

ここで私は、一應日米兩國海軍の全勢力比について考察して見よう。

主力艦においては、隻數および噸數ともにアメリカが優勢で、その比率は、隻數においてアメリカの一〇に對する日本の七・五〇であり、噸數においてア

メリカの一〇に對する日本の七・〇八であり、その平均において、アメリカの一〇に對する日本の七・三〇である。航空母艦においては、隻數において日本が優勢で、噸數においてアメリカが優勢であるが、アメリカの一〇に對する日本の九とでも見て置けば、それで先づ穩當なところだと言へるであらう。

甲級巡洋艦においては、その隻數比が、アメリカの一〇に對する日本の七・五であり、その噸數比がアメリカの一〇に對する日本の六・三であつて、それを平均すると、ほぼアメリカの一〇に對する日本の七といふことになる。乙級巡洋艦においては、隻數において日本が優勢であるが、比較的五千噸以下の小艦が多數を占めてゐるので、その噸數においては稍アメリカが優勢である。從つて、兩者を酌量して考へて見ると、アメリカの一〇に對する日本の一一と見ても、あまり無理な計算だとは思へない。

殘るところは驅逐艦および潛水艦であるが、前者は、その隻數において、アメリカの一〇に對する日本の六・七〇であり、噸數においてアメリカの一〇に

潛水艦は我が國に有利

對する日本の六・八六であるから、その平均勢力比は、まづアメリカの一〇に對する日本の七と見るべきものである。しかし、その差額たる三といつたところで、隻數において五十隻程度、噸數において六萬噸程度のものであるから、今後たとへ如何なる事情が起つたところで、これを氣前よく英國に讓つてやるといふわけにはゆくまい。

ところが、潛水艦の方は、それよりもやや我が國に有利で、隻數においては、アメリカの一〇に對する日本の六・三三であるが、噸數においては、アメリカの一〇に對する日本の八・二六であるから、その勢力比を平均して見ると、アメリカの一〇に對して日本の七・三〇といふことになり、前者の場合に比較すると、それほど大したことはないにしても、兎に角我が國に歩は惡い方でないといふ計算になる。

さすれば、全艦種を通ずる勢力比はどうなるかといふと、主力艦の一〇對七・三〇、航空母艦の一〇對九、甲級巡洋艦の一〇對七、乙級巡洋艦の一〇對一一、

驅逐艦の一〇對七、潜水艦の一〇對七・三〇といふことになるから、その平均比率をとつて見ると、日米兩海軍の全艦種を通ずる勢力比は、恰度アメリカの一〇に對する日本の八・一〇といふことになる。普通世間では、日米兩國海軍の現有勢力を比較して、まづ大摑みに日本の七に對するアメリカの一〇ぐらゐだと考へてゐる傾向があり、私自身もまあそんなものだらうと輕く考へてゐたのであるが、かういふ風に極く丹念に計算して見ると、實際は必ずしもさうでなく、我が國の現有海軍勢力が、意外に強大であることが判り、私も大いに氣を強くせざるをえなかつた。

かやうに有利な數字の出て來た理由を考へて見ると、それは主として大西洋警備艦隊の新設といふことによつて、アメリカの艦艇の一部分が、今後大西洋方面に割かれることになつたためである。さすれば、いよいよ太平洋に戰爭が勃發すると、それらの艦艇は皆太平洋に呼び戻されはしないかといふ懸念も起つて來るであらうが、私は斷じてさうは思はない。何故なれば、アメリカが今

度新設した大西洋警備艦隊は、今こそ差し當つてさう大した必要はないが、いよいよ太平洋に戰爭が勃發し、それとともに獨伊兩國がアメリカの敵として現れることになると、俄にその必要を增して來るのみならず、獨伊兩國海軍の活動如何によつては、その勢力に不足を感じ、さらにより以上の艦艇を必要とするため、止むなくまた太平洋方面の艦艇を割いて、その勢力を補充するといつたやうな場合も生じて來る虞れがあるからだ。

それかあらぬか、現在のアメリカでは、さかんに建艦促進問題が論議され、昨年十月一日にもルーズヴエルト大統領がそれに答へてゐるし、さらに昨年十月二十七日の海軍記念日にも、コンプトン海軍次官がそれに論及し、以前は三十ケ月で出來上つた驅逐艦が、今では僅か二十ケ月で出來上るから、今後のアメリカは、先づ三週間に一隻といふ割合で、續々驅逐艦を造ることが出來るだらうといつてゐる。

日米海軍の實質

ところが、海戰の勝敗といふものは、なにも隻數や噸數などによつてのみ決まるものではない。

軍艦そのものの質が大切だ。十六吋砲彈一發喰らつたら、すぐそれなりけりになるやうな軍艦では、たとへ幾百隻あつたところで、毫も頼みとするに足りない。アメリカの製艦術については、今までにも種々批評された點はあるが、それも現在ではよほど良くなつてゐるであらう。主力艦も殆んど改裝濟であるし、六隻の航空母艦も、例のサラトガおよびレキシントンを除くと、その他は何れも千九百三十四年以後の竣工にかかるものだから、さう妙なものばかりが出來てゐるとは思へない。甲級巡洋艦に至つては、そのすべてが千九百二十九年以後の竣工にかかる新艦揃ひであるし、乙級巡洋艦にしても、オマハ級十隻

を除きさへすれば、その他は何れも一昨年以後に出來上つたちやきちやきの新式艦であるから、主戰派のノックス海軍長官をして、大いに嬉しがらせるだけのものはあるであらう。

我が國の主力艦にしても同樣、それは完全に生れ代つてゐるはずだから、その平均艦齢は、多少アメリカよりも高いが、特にそれを問題にすることは、むしろナンセンスであるかも知れぬ。これに反して、航空母艦のそれは、こちらの方がやや低いが、まづそれも似たり寄つたりの程度のものだ。

甲級巡洋艦においては、アメリカの方が斷然新らしく、乙級巡洋艦においても、やはりアメリカの方が艦齢が若くなつてゐる。それといふのも、つい近頃までのアメリカの艦隊は、いはば主力艦本位とでもいふべきもので、箆棒に頭勝ちの艦隊となつて居り、從つて、その手足となるべき巡洋艦が缺乏してゐたから、アメリカは最近全力を擧げてこれを建造するに努め、一躍して優勢な巡洋艦隊を有つに至つたからだ。

しかし、我が國の巡洋艦が古いからといつて、その艦齢は、甲級巡洋艦において、せいぜい八年乃至十四年、乙級巡洋艦において、一年乃至二十一二年であるから、極く少數のものさへ除くと、後は皆使ひ頃の艦齢で、別に氣に掛けるほどのことはない。

我が國の驅逐艦は、千九百二十五年以後の建造に係るものが五十隻ばかりで、その他は大體千九百二十二三年頃の進水にかかるものである。殊に、二等驅逐艦と呼ばれてゐる排水量八百二十噸以下七百五十噸までのものは、概して千九百二十二年以前に出來たもので、その艦齢としては決して若い方でない。

ところが、アメリカの方では千九百二十五年以前のものが百七十隻ばかりもあるから、その中五十隻を英國に讓渡したとしても、まだ後に百二十隻は殘ることになる。さすれば、アメリカの驅逐艦は、千九百二十五年以後のものが約五十隻、それ以前のものが約百二十隻といふことになつて、その艦齢を平均して見ると、むしろ我が國の方が幾らか若いと言へるであらう。

潜水艦は概して我が國の方が若く、呂號に屬する一部の艦を除くと、他はすべて千九百二十五年以後のものである。しかし、アメリカの方ではS級をはじめ、R級やO級などは、いづれも千九百二十五年の建造に係るもので、しかもそれが六十幾隻もあるといふのだから、その點では、アメリカも餘り自負することは出來ない。

その他、艦艇の素質について語るべきことは多い。もつとも大切なのは、主力艦や甲級巡洋艦などにおける主砲の彈量であるが、それはもう一切省略することにしよう。乙級巡洋艦や驅逐艦などの速力を比較することも、それに劣らず大切ではあるが、これまた煩を省くことにしたい。

潜水艦について一言して置きたい點は、我が國には特に多數の航洋潜水艦があり、その航續力は一萬海里乃至一萬五千海里以上にも及ぶといはれてゐる。また、あいふ特殊の艦型と機能とを有する艦艇では、とかく居住性といふものが問題となり、それがために著しく艦艇の能率を減殺する虞れのあるものだ

が、さういふ點になると、我が國の方が遙かに好都合なコンディションの下に置かれてゐて、容易にアメリカなどの模倣しえない點があるらしい。

これを要するに、艦艇の一々の性能にまで立入つてかれこれ批判して見たところで、それが果して背裝に當るかどうかも怪しいし、また假にそれが多少背裝に當つてゐたところで、それで直ちに全局の勝敗が決定するといふものではない。

ドイツの袖珍戰艦なども、本當に實戰を遣つて見るまでには、いろいろその性能が誇張されて吹聽されたものだが、ウルグアイ沖海戰の結果を見ると、アメリカの海軍大佐クレーグの指摘した通り、グラーフ・シュペーの有する十一吋砲は、八吋砲艦エクゼター、六吋砲艦アジャックス、および六吋砲艦アキレスと交戰して、明かに香ばしくない成績を擧げてゐる。して見ると、他に適切な方法もないから、止むなく砲熕や速力などを問題にはして見るものの、それは結局荒見當をつけて見るだけのことで、あまり大した權威のあるものではない。

造艦計畫は一切これを公表しない

前の歐洲大戰においても同樣で、いかに卓越した海軍研究家でも、排水量二萬七千噸の巨艦クヰーン・メリーが、獨艦デルフィンゲルの發射した二發や三發の彈丸を受けて、それで他愛もなくお陀佛をいつて終ふだらうなどとは、おそらく誰れもこれを豫想してゐたものはないであらう。

最後に今一ついつて置きたいことがある。それは外でもない。我が國が軍縮條約を破棄して以來、我が海軍は將來の造艦計畫は勿論、現在建造中の艦艇も、一切これを公表しないのみならず、すでに進水した艦艇でも、その性能の詳細な點に至つては、出來るだけそれを公表しないことにしてゐるから、それについて絶對に正確だといふ數字を擧げることも出來ないし、從つてアメリカのそれと確實な比較を試みることも出來ない。乙級巡洋艦以下においては、一層その傾向が著しいため、私は止むなく幾隻とか約何隻とかいふ言葉を使つたが、それは眞に止むをえざるの致すところであるから、特に讀者諸君の御諒解をえて置きたい。

アメリカの方でも、それにはよほど閉口してゐるものと見え、時々それについて不平を並べ立ててゐるが、それは各國の流儀々々で、ぜひともかうしなければならんといふ條約もないのだから、それも結局諦めるより外に道はないであらう。ソヴイエツト海軍のごときは、もうよほど以前からそれを遣つて居り、一時は闇黒海軍といふ渾名もあつたぐらゐで、徹頭徹尾祕密主義を守つて來たが、列國はそれをどうするわけにもゆかなかつた。

第七　協力國の援助

英米協力の限度

私は今まで縷說したところで、日獨伊三ケ國對アメリカとの戰爭は、必然的に海軍中心の戰爭となり、從つてそれは日本が主役を演ずる立場になるであらうと決論した。

さりとてそれは單なる日米戰爭ではなく、やはり樞軸國對アメリカの戰爭であるのみならず、相手國のアメリカの方にも、やはり英國といふ强力な味方が附いてゐるのであるから、それを唯日本とアメリカとの戰爭だと思つて、何から何までさういふ立場からのみ物を判斷してゐると、それこそ大變な誤謬を生

する虞れがある。從つて、吾人はその點についても一應考へられるだけのことは考へて置かなければならぬ。

さすれば、樞軸國側と戰爭の場合、英國は果してどの程度までアメリカの作戰に協力し得るであらうか。

まづ最初に言ひ得ることは、英國海軍の全勢力またはそれに近いものをもつて、極力獨伊兩國海軍の活動を牽制し、それをして出來るだけアメリカの煩累たらしめないやうにすることだ。現に、英國は結果においてその通りのことを遣つてゐるのだから、それを今後も尙ほ繼續するといふだけのことで、特にこれといふ新しい任務を負擔するわけではない。殊に、アメリカには今度新設した大西洋警備艦隊といふものがあつて、それがある程度まで英國海軍に協力すると、英國としては全然單獨でそれを遣るといふわけではないから、むしろ現在よりも幾分仕事がやりよくなつて來るのではあるまいか。

しかし、太平洋方面における作戰に對して、若干の勢力を有する英國艦隊が

直接間接にアメリカ艦隊に協力し、ある程度までアメリカ艦隊の作戰を扶け得るかどうかといふことは、すこぶる疑問だといはなければならぬ。

すでに說明したごとく、英國支那艦隊の過半は、戰爭勃發後、間もなく西方に移動してゐるし、甲級巡洋艦キャムベラ、および最近改裝を終つたオーストラリアの二艦を主力とする濠洲艦隊も、近く本國を離れて大西洋方面に赴くといふ情報がある。英國はせいぜいそれらのものを極東に送り遣すぐらゐなことで、それ以上に多少とも有力な艦隊の一部を割いて、これをシンガポールまたはその他の基地に送るといふやうなことは、到底なしえないのではあるまいか。最近のロンドン電報に據ると、萬一の場合、英國の主力艦を收容するために、オランダ政府は、蘭領印度海軍の根據地たるスラバヤ港を擴張するといふことだが、以上の見地から考へると、それもあまり當てにならない報道である。

英國では概して日米兩國の武力的衝突を欣んでゐないといはれてゐる。それにはアメリカが日本と戰へば、必然的にアメリカの對英援助が鈍つて來るとい

英國を危地に投ずる結果となる

ふ理由もあらうが、私はひとりそればかりだとは思はない。日米戰爭は、取りも直さず日英戰爭を意味するから、太平洋に戰爭が勃發すると同時に、極東における英國の權益および領土は、たゞちに非常な危險に瀕して來る。英國がぜひともそれを救はうと思へば、彼は止むなく强力な艦隊を極東に送つて、出來るだけこれを防衛しなければならないが、ヨーロッパにおける現在の狀勢は、おそらくそれを許すまい。

さすれば、日米兩國の武力的衝突は、惹いて英國を危地に投ずる結果になるから、特にその點を顧慮する英國としては、勢ひアメリカの自重を望むことになるであらう。それかあらぬか、昨年十月十日の下院において、英國のバトラー外務次官は、その當時恰も協議中であつた英米協力の限界について說明し、それは單に軍需品の供給禁止その他これに類する一般問題に過ぎないといつたが、それは勿論さうあるべきことだ。尤も、その點については、私と全然考へを異にしてゐるものがあり、アメリカのスターリング少將のごときは、さし當りその代表的な人物の一人であるから、この機會に多少それについても說明して置きたい。

スターリング少將の意見

スターリング少將の意見といふのは、アメリカが日本と戰ふ場合、英國はキング・ジョージ級三萬五千噸の主力艦四隻を極東に送つて、これと協力するはずだといふのである。

その物の言ひ方を見ると、いかにも自信たつぷりで、英米兩國のあひだには、すでにそれに對する充分な諒解が出來てでもゐるかのやうな口吻であるが、それは果してどんなものであらうか。第一、さういふ作戰上の根本問題は、その性質上これを出來るだけ祕密にして置くべきものだから、若しそれが本當の事實だとすれば、それを露骨に彼が公言するといふのも可笑しいし、またそこまで彼が立入つて英米兩國の諒解事項を承知してゐるといふのも可笑しい。

元來、アメリカの提督たちは、我が國のそれと違つて、非常に政治家のやうな風格があり、そのいふことも半ば宣傳効果を覘つてゐる點があるから、それ

英國は充分な海軍力を保有せず

をこちらが一々眞面目に受取つてゐると、大變馬鹿な眼を見る場合もある。有名なブラット提督のごときも、彼が作戰部長の要職にあつた時代には、さかんに宣傳的言說を公にしたもので、その方が反つて彼の本職ではないかしらと思はせるやうなところさへあつた。

私は前に獨伊兩國海軍に較べると、英國海軍は非常に優勢であるといつた。それは慥かにさうであるに相違ないが、それだけ優勢な海軍力を保有してゐても、獨伊兩國との戰爭を遂行するために、その宏大無邊な戰略海面を引受け、且つその多種多樣な戰務を負擔することになると、現在の英國は、決して充分な海軍力を保有してゐるとは言へない。

英國艦隊の任務

試みに考へて見よ。第一にヨーロッパ大陸を封鎖するために、相當强力な艦隊が必要である。英國の目的とする機敏封鎖を有効に實施しようとすれば、到底僅かばかりの艦艇では役に立たない。

第二に本國を防備するためにも、また相當强力な艦隊が必要である。本國そのものはすつかり開け放しにして置いて、全艦艇を皆他の方面の御用に立てさせるといつたやうなことをすれば、それこそとんな異變が起らないとも言へぬ。

第三に南北大西洋をはじめ、所在の重要海面に策動して、極力獨伊兩國艦隊の活動を抑制するためには、さらにより一層强力な艦隊を必要とする。さもなくば、獨伊兩國艦隊は、自由に外洋に出動して、根抵から英國の制海權を覆へして終ふであらう。

多數の護送船を配置する必要がある

第四に英國に向ひ、または英國を發する多數の運送船を保護するためには、サザンプトンからアメリカやカナダに至る航路をはじめ、西阿や、南阿や、中米や、南米などに至る各航路に對し、ぜひとも多數の護衛艦を配置する必要がある。若し英國がコムボイを廢止するか、または或る程度までそれを簡略にし

地中海の列國の艦隊勢力

て比較的低速力の船舶に單獨航行を許したりすれば、さなくとも猛威を揮ひつつある獨伊兩國の潜水艦は、一擧にして英國の貿易路を遮斷し、反つて英國をして饑餓の慘に陷入らせるやうなことになるかも知れぬ。

英國海軍の負擔すべき任務は、單にそればかりではない。東地中海における英國の地位を維持し、兼て埃及およびスエズ運河の安全を保障するためには、ぜひともイタリー海軍に對抗して、これを擊破するに足るだけの海軍力を派遣しなければならぬ。

一說によると、フランスの降服前、地中海に配備されてゐた英佛兩國對イタリーの海軍力は、大體前者の戰艦九隻、巡洋艦二十八隻、航空母艦三隻、驅逐艦五十六隻、潜水艦四十八隻に對し、後者の戰艦六隻、巡洋艦十九隻、航空母艦一隻、驅逐艦百隻、潜水艦九十八隻といふ割合になつてゐたといふことだ。さすれば、フランスが降服して、その艦隊勢力中から戰艦六隻、巡洋艦十五隻、航空母艦二隻、驅逐艦三十二隻、潜水艦三十八隻といふものが脫落した今日、

英國艦隊の勢力は不足勝

英國が依然として以前の勢力を維持しようとすれば、取りあへずそれだけのものを新たに補充しなければならないが、それが果して出來るかどうか。

チャーチル首相の豪語にも拘らず、現在の地中海における英伊兩國海軍の對立は、むしろイタリーに好都合であるときへ流傳されるのも、萬更根據のないことだとは言へない。

英國艦隊の勢力が不足勝で、とかく手が廻りかねてゐるといふことは、ドイツの潜水艦戰が、最近いよいよ活況を呈してゐるといふ事實だけを見ても、充分にこれを想像することが出來よう。

現に、ワシントン方面の觀測によると、戰爭勃發後昨年の十月廿七日に至るまでの擊沈隻數は約九百三十隻、その噸數は約三百四十萬噸に上り、昨年五月末までは一日平均約六千三百噸であつたものが、それ以後は、一日平均約一萬二千八百噸に激增したといふのである。ドイツ側に言はせると、その數字は一層驚異的で、昨年の七月三日より同八日に至る一週間のごときは、その船舶噸

英本國そのものが危殆な狀態である

數約六十萬九千噸に達し、一日平均約八萬七千一百噸に上るといふのだ。その數字に多少の誤謬があるにしても、貿易路における英國艦隊の配備が、最近頓に手薄になつたのではあるまいかといふ懸念は、充分これを挾む餘地があると思ふ。

さういふ慘めな狀態で、滿足に自國の海面をも守りえないでゐる英國が、今太平洋に戰爭が起つたからといつて、すぐ早速に主力艦の四隻も引拔いて、これを氣前よく極東に送るといつたやうなことが、さう易々と出來るわけはない。

宣傳屋のスターリング提督は、果してどういふ風に考へてゐるか判らないが、英國にとつて最も大切な場所は、斷じて香港でもなければ、シンガポールでもない、勿論英本國だ。その本國の守りがきちんと出來てゐて、そこには何の不安もないといふ狀態であれば、英國は四隻は愚か、五隻でも七隻でも、欣んでその主力艦を極東に送るであらうが、本國そのものが頗る危殆な狀態にあり、强氣滿腹のチャーチル自身でさへ、一方ならずその點を苦慮してゐるといふ今日、英國は何を戸惑うてさういふ莫迦々々しいことをするものか。アメリカの宣傳提督などが飛ばした與太は、あまり眞面目になつてこれを相手にしない方がいい。

英國の極東軍司令部創設

しかし、上述のごとき私の意見は、何も戰時の英國が極東を全然無防備の狀態に放置しておくであらうといふ意味ではない。

現に、英國は最近にも極東軍司令部を創設することに決定し、ブルック・ボーバム空軍大將をその司令官に任命して、新たにビルマ以東における極東軍の統制を强化し、さらにその指揮權の單一化を計ることにしたと傳へられてゐる。しかもその下には、マレー半島をはじめ、ビルマおよび香港における極東軍司令官が隷屬し、且つ英國支那艦隊司令長官とは、絕えず密接な聯絡を保つて協力するのみならず、濠洲およびニュージーランドとも相提携して、いはば水も漏らさぬ防衛陣を張るといふのだから、假に太平洋に戰爭が勃發した場合には、勿論出來るだけの艦艇を極東に送りもするであらうが、それはむしろ防禦的な

艦隊根據地または空軍基地を提供

程度に止まるもので、積極的にアメリカ艦隊と呼應して、終始その作戰に協力するといつたやうな程度のものは、到底これを送り得る餘地があるまいといふのである。

艦隊以外の方法をもつて、英國がアメリカ艦隊の作戰に協力するとすれば、それは艦隊根據地または空軍基地を提供して、それを自由にアメリカの用に供することであるが、それも果してどういふものであらうか。

後者の場合についていふと、極東における英國の領土は、唯一の香港を除くと、他は何れも北緯六度以南のところにあり、日本本土との距離は、ほとんど二千海里以上にもなるから、それでは到底日本本土を脅威することが出來ないのみならず、すでにフイリツピン群島を領有してゐるアメリカとしては、別にそれを必要とする立場にも置かれてゐない。從つて、アメリカが英領ボルネオまたは英領マレー半島に空軍を送り、そこで何かの作戰に從事することがあるとすれば、それは英國がアメリカ海軍の作戰に協力するものではなく、むしろ

米國艦隊のシンガポール移駐

アメリカが英國の極東作戰に協力するもので、全然主客の地位を顚倒し、問題そのものの性質も、おのづから變つて來るものだと思はなくてはならぬ。

さらに艦隊根據地であるが、それは唯一のシンガポールがあるばかりで、その他には絕對にこれといつて擧ぐべきものはない。

ジョン・ガンサーは、日米戰端を開く場合には、吾人は最初からシンガポールを借用出來るものと決めてゐると言ひ、最近アメリカまたは英國から來る情報にも、英米兩國の間には、目下その問題についての協議が行はれてゐる、否すでに行はれずみで、近くその結果が發表されるであらうともいはれてゐる。ところが、第三章において私が說明した通り、アメリカ艦隊のシンガポールの移駐は、それ自身戰爭の勃發を意味するから、本當にアメリカ海軍がそれを遣らうといふ場合には、これを阻止せんとする日本艦隊とのあひだに、豫め一戰を交へるだけの覺悟をしておくことが必要であるのみならず、假にそれを遣らうと思つても、若し戰爭が事前に起つてゐる場合には、我が陸海軍の協力によつ

て、シンガポールおよびその附近一帶の地域は、充分日本軍の手に委せられてゐるといふ場合もあり得るから、何か特別に好都合な事情でも起らない限り、いくら英米兩國の意志が合致したからといつて、さう易々と米國艦隊がシンガポールへ移駐出來るといふものではない。

それについて、ルーズヴエルト大統領の初代ブレーン・トラストの一人であるレーモンド・モーリーは、まことに穿つたことをいつてゐる。

彼はいふ。——米國艦隊をシンガポールに派遣するといふ議論の弱味は、それを遂行する途上に、あまりに多くのもしもがあることだ。もしも吾人がハワイとシンガポールとをつなぐ長距離の後方聯絡を保てるならばとか、もしも吾人が日本艦隊との衝突を挑發することなくして、米國艦隊をシンガポールに到達させることが出來るならばとか、もしも西方からシンガポールへの聯絡を保ち得るならばとか、もしも吾人の力で蔣政權の抗日戰を維持することが出來るならばとか、もしも吾人の國防が現狀のごとく不備でなかつたならばとかいつ

た風に、米國艦隊のシンガポール移駐には、無數の前提條件が必要となり、米國艦隊の力による蘭領印度、佛領印度支那、オーストラリア、乃至ニュージーランドの現狀維持には、何一つ明確な保障といふものは與へられてゐない。

事理明晰、一點の疑義をも殘すところがない。勿論、さういつたからといつて、小さな艦隊や、少數の奇襲艦艇などが、あるひは太平洋を横斷し、あるひは希望峯を迂回して、ひそかにシンガポールに潛入することはあり得るであらう。その點においては、ひとりシンガポールのみならず、濠洲およびニュージーランドの諸港灣は、シドニーのポート・ジャクソンをはじめ、メルボルンにしても、オークランドのデヴオンポートにしても、充分アメリカ艦隊の用に供し得るのみならず、ノーザン・テリトリーのファン・ディーメン灣のごときは、近く我が南方海面において作戰せんとするアメリカ艦隊に對し、むしろ絶好無二の根據地を與へるものであるかも知れぬ。

ところが、ここにぜひ考究して置かなければならない重大問題がある。英國

が若しその對獨抗戰に失敗し、意氣地なくドイツの前に降服するか、または降服しないまでも、その政府がカナダのトロントまたはモントリールへでも遁げ出した場合には、その海軍は全體どうなるかといふことだ。

きはめて稀有な場合として考へられるのは、その最後のカタストロフイが來るまでに、英國艦隊が全滅またはそれに近い程度にまで傷ついてゐるといふこと。

とだが、それは先づ考へられない。次に考へられることは、英國が降服した場合に、その艦隊を自爆するか、またはドイツの手に引渡すかといふことだが、これも先づあり得ることのやうに思へない。若し上述のやうな場合が起れば、獨伊兩國艦隊は、その全勢力、またはその全勢力に加へるに、新たに投降した英國艦隊の勢力を合算しただけの大勢力をもつて、極力アメリカに當るやうなことになるから、その場合のアメリカとしては、明かに由々しい事態に逢會することになるであらう。

もつともあり得ることは、對獨抗戰に挫折した英國政府が、その本國を放棄

英國がドイツに敗戰した場合

してカナダに逃げ出すやうな場合は勿論、假に逃げ出さずに降服するやうな場合でも、英國は豫めその艦隊をアメリカに送り、それが絶對にドイツの手に渡らないやうな策を講じるであらうといふことだ。

最近の電報によると、アメリカの驅逐艦五十隻と引替へに、英國が大西洋の戰略基地若干をアメリカに讓與した時、アメリカの國務卿ハルの質問に答へ、チャーチルは英國が若しドイツに對して敗戰するやうな場合が起つても、英國艦隊は絶對にこれをドイツに引渡さない考へだといつてゐる。それはただその時のがれのいい加減な口上ではなく、本當にチャーチルの胸臆深く祕められてゐる最後の對策であらう。

その場合のアメリカは、唯一の與國たる英國の崩壞によつて、直接間接に多大の打擊を受けることは明白であるが、ただ單にそれが海軍に關するかぎりにおいては、ほとんど何等の打擊をも受けないのみならず、反つてその大勢力を自分の手に收め、これを自由自在に活用することが出來るから、むしろ非常な

便宜を受けるものだといはなくてはならぬ。手廻しのいいアメリカ政府は、すでにその場合をも考慮に入れてゐるものと見え、ハル國務卿は、無遠慮にもチャーチルに對して英國が降服する場合の覺悟まで聞いてゐるが、現在唯今の狀勢を基礎として言へば、それは必ずしも杞憂に屬することだとは言へないから、まさかの場合を危惧するアメリカが、敢てその點を質問したからといつて、强ちそれを薄情だといつて非難するわけにはゆかない。

支那には昔から鼎の輕重を問ふといふ言葉がある。現在唯今の英國は、鼎の輕重をもう問はれるどころか、さらに一歩を進めて、その存亡興廢の如何を問はれても、あまり不平をいふことの出來ない狀態になつてゐる。

獨伊兩國の協力

さて然らば、日本に對する獨伊兩國の協力については、果してどの程度のことが考へられるであらうか。

まづ最初に考へられることは、アメリカが大西洋における安全を顧慮するために、さし當り大西洋警備艦隊を新設するといふ決心を固めただけでも、それは獨伊兩國が間接に我が國と協力したことを意味するもので、それが及ぼす實際的効果については、決してこれを輕視することが出來ないといふことである。何故なれば、堂々たる艦隊戰を試みようとする場合、わが艦隊が、たまたまアメリカ艦隊の一〇に對する七の勢力で戰ふか、それともまたアメリカ艦隊の一〇に對する八の勢力で戰ふかといふことは、ひとりその場合に臨んだ戰士の意氣または自信を左右する重大問題であるのみならず、現實にその勝敗の結果をも支配する重大問題であるからだ。

次ぎに考へられることは、獨伊兩國が我が國に協力することによつて、我が國は、その作戰根據地または艦隊根據地を、遠くヨーロッパの方面に求めることが出來るから、我が國はそれによつて直接間接に多大の利便を受けるのみな

らず、敢てそれを欲するといふことならば、我が海軍は、進んで大西洋に移動し、そこで自由に作戰することも出來るであらうといふことだ。假に、伊號潛水艦の一部が、フランスまたはベルギーの海岸に移動し、獨伊兩國の潛水艦と協力して、極力南大西洋におけるアメリカの貿易を破壞し、かねてその艦隊を攻擊するとしたら、それによつて蒙るアメリカの脅威は、決して生優しいものではあるまい。アメリカのヘブバーン提督が、夙にその點に着目し、吾人が日本と戰爭をする場合、ヨーロッパの一ケ國または數ケ國が、これと協力して共にアメリカを敵とするやうな事態を生ずると、それは大西洋におけるアメリカの交通路に對し、必ずや多大な障碍を形成することになるであらうといつたのは、よく這般の消息を看破したものである。

言ひ換へると、アメリカと戰ふ場合の日本が、遠くヨーロッパの方面に根據地を求め得るといふことは、それだけ各艦艇の航續力を增加したと同樣な効果を有つことになる。世界の一局部においてしか活動出來なかつた艦隊が、ほとんど世界の全般に亙つて活動出來ることになり、日本海軍の戰場は、これをいづれの海洋においても求めえられることになるであらう。

尤も、實際的に考へて見ると、戰艦その他の水上艦艇は、假にヨーロッパの方面に移動しようとしても、その中途において敵國艦隊の邀擊するところとなるから、容易にこれを實行することは出來ないが、ひとり潛水艦に至つては然らず、一度その企圖を遂行せんと欲する時は、自由にインド洋を突破し、さらにアフリカの突端を迂回して、遠くフランスまたはベルギーの海岸に到達することが出來るであらう。途中、マダガスカルの一港または西アフリカの某地點において、都合よく燃料その他の補給を受けることが出來るといつたやうな事情の下にあると、それは一層實行し易いことになる。

最近の新聞電報を見ると、しきりにフランスの空軍および海軍の接收といふことが噂されてゐる。

空軍は兎も角として、若し本當にフランス海軍の接收といふことが實現し、

それが獨伊兩國海軍の勢力中に包含されると、それは必然的に大西洋における獨伊兩國の牽制力を增加するから、我が國は間接に多少の便益を享けることになるであらう。尤も、現在のフランス海軍は、昨年の七月三日より七月八日に至るあひだにおいて、英國の武力接收、オラン海戰、その他各種の事情により約三十隻の艦艇を喪失し、しかもその中には、排水量三萬五千噸の新式戰艦リシュリュー以下七隻の戰艦、およびデュケーヌ以下三隻の甲級巡洋艦をも含んでゐるから、その勢力はよほど激減してゐるが、それでも尙ほ戰艦二隻、航空母艦四隻、甲級巡洋艦四隻、輕巡洋艦十隻、驅逐艦約六十隻、潛水艦約八十隻を保有してゐる。若しこれだけのものが獨伊兩國の手に接收され、それが新たに英國艦隊に對抗する新勢力として現れたら、それは大いに刮目して見るに足るものがあるであらう。

しかし、ヴィシー政府が、實際に獨伊兩國の手にその海軍を引渡した場合には、現に英國に接收されてゐる諸艦艇は勿論、目下アレキサンドリアにおいて武裝を解除してゐる諸艦艇も、それはすべて英國海軍の手に歸することが必定だから、英國はそれによつて戰艦三隻、甲級巡洋艦三隻、乙級巡洋艦三隻、驅逐艦十一隻、潛水艦二隻の新威力を加へることになるであらう。それだけの新威力を加へたとしても、まだ遠く獨伊兩國に接收されたそれには及ばないから、フォンタンブローにおけるヒトラー、ラヴァル會談の結果に對して、特に英國が敵愾な態度を示したのも、決して不思議なことではない。

第八　日本への遠征

渡洋進攻作戰

太平洋戰爭の構想

いくらずば抜けた天才であつても、人間に與へられた能力には、おのづから限度といふものがある。さう無暗に獨創的な思案が浮んで來るものではない。

太平洋における日米兩國の戰爭にしても、やはりそれと同樣で、ホーマー・リー以來、それについて色々の空想を逞しうしたものはあるが、いづれも似たり寄つたりの程度のもので、私が思はずこれは素晴らしい！　といつて讃歎せざるをえなかつたやうなものは、不幸にして未だお目にかかつたことがない。ヘクター・バイウォーターなどは、かなり合理的な構想を組立てた方であるが、

敵の戰爭意志を滅却せしめる三つの方法

アメリカの理想的戰法

それでも結末に至つて馬脚を露はし、それを結局一篇の傳奇小說乃至冒險小說にして終つた。

戰鬪によつて敵の戰爭意志を滅却せしめる方法としては、僅かに三つしかない。

その第一は、攻城野戰によつて敵國の領土を占領し、それによつて止むなく敵を降服せしめること。その第二は、海軍力によつて敵國の領土を封鎖し、それによつて敵の抗戰を不可能ならしめること。その第三は、敵の領土附近に進攻し、敵の領土を空爆して、敵の抵抗力を滅盡せしめること。

以上三つの方法はあるが、第一の方法たる敵地攻略は、絕對にこれを行ひえざる事情の下にある。從つて、第二または第三の方法を行ふものとすれば、日本を屈服せしめんとするアメリカは、果して如何なる戰策を執るであらうか。

アメリカの思惑通り理想的な戰法を執ることが出來るものとしたら、アメリカは先づその全艦隊をハワイに集中し、これを直接日本の近海に進攻せしめる。

然る後日本艦隊を一擧に撃滅し、フィリッピンまたはその他の地に前進根據地を得、そこを基地として、日本に對する近距離封鎖を行ひ、それと同時に、絶えず日本の國土を空襲し、徐ろに日本の降服を待つといふ方法を執るであらう。

しかし、かかる方法を執るものとすれば、アメリカ艦隊の實力は、優に日本艦隊を撃破するに足るものでなければならないのみならず、都合よく日本艦隊を誘致して、これと一戰を交へ得る機會を掴むことが出來た上に、アメリカの前進根據地たるフイリッピンまたはその他の地點が、よくその任務を負擔し得るだけの資格を有ち、且つアメリカ艦隊の移動以前に、斷じてそれが敵手に落ちないだけの確乎たる地歩を有するものでなければならぬ。若し以上の條件において缺くるところがあれば、アメリカはよくその基本作戰を遂行しえざるのみならず、作戰の齟齬または破綻によつて、反つて不測の禍を招き、また起つ能はざるがごとき敗戰を喫することになるであらう。

私が既に說明した通り、現在のアメリカがハワイに集中し得べき艦隊勢力は、

せいぜい我が國のそれに匹敵し得る程度のものである。

進んで敵地に肉薄するがために、前代未聞の大洋作戰を行はうとすれば、たとへ二割や三割の優勢にあつたところで、それは殆んど何のたよりにもならない。眞珠灣から東京灣に至るまでには、北方航路で三千四百四十三海里、南方航路で三千五百五海里、大圏航路で三千三百九十七海里の距離がある。一時間十八節の速力をもつて進攻したところで、海波渺茫たる彼方に、富士の秀靈な山容を仰ぐには、前後八日に近い日子を必要とするであらう。しかも、その八日のあひだには、勿論夜間といふものがあるし、假に晝間であつても、濃霧深く海上を鎖して、毫も夜間とえらぶところのない日もあるに相違ない。かかる場合において、萬里遠征の途にある進攻艦隊は、如何にしてこの危險に充ちた海面を航行せんとするであらうか。暴虎馮河の勇を敢てせざるかぎり、いかに氣力旺盛な提督といへども、到底かかる成算のない冒險を斷行し得るものではあるまい。

日本の奇襲艦艇

日本への進攻は不可能

日本進攻の途に就かんとするアメリカ艦隊は、足一歩その根據地から外洋に踏み出したが最後、すでに戰爭狀態に置かれたものと思はなくてはならぬ。

日本の奇襲艦艇、特に潛水艦は、絶えず好機を覘つてこれを襲擊するのみならず、日本の飛行機といへども、無爲にしてこれを傍觀してゐるものではあるまい。特に夜戰を得意とする水雷戰隊のごときは、闇黑な夜の帳がかかげられるや、一齊に彼等の活動をはじめ、蜿蜒長蛇のごとき進攻艦隊を襲うて、これを收拾すべからざる混亂に陷し入れ、極力その勢力を減殺せんと試みるであらう。一日二十四時間、來る日も來る日もかかる狀態をもつて終始したら、進攻艦隊の勢力が、それによつて致命的な打擊を蒙るのは勿論、各艦艇に搭乘して萬里の遠征に從事してゐる乘組員といへども、連日の緊張と戰務とのために、ほとんど疲勞困憊の極に達し、いよいよその目的地に到達した時には、もはや何事をも爲し得る餘力なきに至つてゐるかも知れぬ。

從つて、日本進攻を策するアメリカ艦隊が、著しく懸隔せる大勢力を擁してゐる場合でさへ、完全にその目的を達することは、まづ不可能事に近いといはなければならない。

渡洋作戰はむしろ

況んや、二割や三割程度の優勢をもつて進攻しては、渡洋作戰の中途において、敵は容易にその優勢を打破し得るのみならず、たとへその優勢を維持して目的地に達しえた場合でも、逸をもつて勞を邀へ得る有利な地步を占めてゐる敵は、その戰場が與へるすべての利益を併せ收めて、毫も進攻艦隊の數字的優勢に驚かず、敢てこれを迎擊し、進んでその殲滅を計り得るであらう。

殊に、我が國の場合においては、陸に强大な空軍が存在し、それが密接に海軍と協力することによつて、徹頭徹尾國土の防衛に當り得るから、進攻艦隊の航空母艦に積載した一定限度の空軍のごときは、一擧にこれを制壓した後、進んでその艦隊を襲ひ、これを支離滅裂な狀態に陷らせるぐらゐなことは、さまで困難なことではない。

果して然らば、多少の優勢を恃むアメリカ艦隊が、前代未聞の渡洋作戰を敢

行して、直接日本の近海に進攻するといふがごときは、むしろ一種の空想ともいふべきものだ。

アメリカの進攻艦隊が、都合よく日本の近海に到達さへすれば、相違なく日本艦隊と一戰を交へ得る機會が與へられるものだと決めてかかるのも、明かに手前勝手の獨斷だといはなければならぬ。主として攻擊防禦の戰法を執り、進んで積極的態勢に出る必要のない日本艦隊は、たとへアメリカ艦隊が來攻しても、それがみづから欲せざる場合であれば、强ひてこれと一戰を交へる必要はない。アメリカ艦隊の攻擊に應酬するには、我が國の空軍および奇襲艦艇をもつてするも、なんら困惑しない地位に置かれてゐる。

さすれば、アメリカの進攻艦隊は、日本艦隊を擊滅する機會も與へられず、さりとて無制限に永く日本の近海に淹留すれば、附近に根據地を有たない進攻艦隊は、早晩燃料の缺乏を訴へることが必定となつて來るから、彼等はほとんど何等の目的をも達することなく、ふたたび悄然として歸航の途に就き、沁々

この勞苦の多かつた遠征を回顧して、その如何に愚擧中の愚擧であつたかを痛恨する外はあるまい！　私は夙にかかる場合のあることを想像し、それをもつて日本の無手勝流と呼んでゐる。

萬里遠征のアメリカ艦隊を迎へ、これを我が近海に捕捉して、徹底的に擊破しようと思へば、勿論我が大艦隊の參加を必要とするであらう。しかし、これを徹底的に擊破しないまでも、あるひは潛水艦により、あるひは爆擊機により、あるひは水雷戰隊により、あるひは高速魚雷艇により、あるひは恐らく機雷の協力をも得ることにより、ほとんど寸時の間斷もなく、これを襲擊また襲擊したとしたら、彼等は果して如何にするであらうか。

試みに思へ、日はすでに水平線下に落ちたが、蒼茫たる月光は、夢のごとく進攻艦隊の影を包んでゐるといつたやうな場合、宏大な海面を壓して、とかく不自由勝ちな敵前運動をつづけてゐる數百隻の艦艇が、いかに困難な事情の下に置かれ、且ついかに重大な危險の下に曝されてゐるかといふことを！

従つて、現在唯今のアメリカ海軍は、いかにその威容を誇示して見たところで、まだ直接日本に進攻し得るだけのコンディションにもゐないし、またそれに必要なだけの優勢な艦隊をも有つてゐない。

假に何かの間違ひで大瑕なく日本に進攻しえたとしても、果して日本艦隊と一戰し得る機會がえられるかどうかも問題であるし、また假にそれがえられたとしても、これを撃破し得る可能性に至つては、ほとんど皆無だといつてもいい狀態だ。從つて、かかる無謀を試みた結果は、あたかも七百年前のクビライ艦隊と同樣、反つて自分自身を危險な地位に置くこととなつて、意外な災厄を招致するに過ぎないであらう。

かやうに考へて來ると、粗大おが屑にも比すべき腦味噌の所有者たるヤーネル提督などが、聲を大にして日本征服論を唱へ、優勢なアメリカ艦隊の偉力をもつてすれば、劣勢な日本艦隊のごときは、容易にこれを二週間内に撃破し得るであらうなどと放言するのは、むしろ自己の愚昧を告白するものだといはなければならぬ。

私は敢ていふ。——アメリカにして日本近海に適當な前進根據地を有たないかぎり、絶對に日本進攻は不可能だと。果して然らば、アメリカは何處にそれを求めようとするか。八丈島または小笠原島を奪取するといふがごときは、結局一箇の冒險譚に過ぎないのみならず、假にその至難な企圖が成功したとしても、さういふ彈丸黑子の小島をもつてしては、到底尨大なアメリカ艦隊を養ふには足りない。戰時における大艦隊を收容し、これをして全幅の機能を發揮させるためには、それに適はしい各種の條件を具へ、且つそれに必要な各種の施設を有する場所でなければならぬ。

ところが、八丈島や小笠原島などは、これを日本が利用する場合には、時として無限の價値を生ずることもあるが、さりとてこれをアメリカが利用し、その艦隊のために好個の前進根據地たらしめようとしたところで、それは頭からそれに必要な資格を缺いてゐるから、到底その用に供することは出來ない。

フイリツピン群島への移駐は困難

前進根據地としての比島

かく言へば、何人にも直ちに記憶に上るのは、例のフイリツピン群島である。同群島は、日本の南方近く存在するのみならず、その主島たるルズン島には、スペイン時代からの海軍根據地カヴィテ軍港があり、それは引續いてアメリカ・アジア艦隊の基地となつてゐる。アメリカの主力艦隊が、これを前進根據地として利用することさへ出來れば、それによつて容易に日本を制することも出來るやうに思はれるが、それもいはば机上の空論にとどまり、もつとも肝腎な實現の可能性に至つては、すこぶる稀薄たるを免れない。何故なれば、アメリカ艦隊のフイリツピン群島への移駐は、すくなくとも三つの理由によつて、これを實行することが困難であるのみならず、敢てこれを實行して見たところで、さして眼醒ましい効果を擧げ得る見込はないからだ。

日本の檜下にある比島

その第一の理由は、アメリカ艦隊のフイリツピン移駐以前に、それは日本の手に落ちる虞れがあり、これを絶對に妨止することは、さし當り困難だと思はれてゐるからだ。ハワイからフイリツピンのマニラへの距離は約四千九百海里であるが、長崎からフイリツピンへのそれは、わづか一千三百海里に過ぎない。殊に、日本の前哨地點ともいふべき臺灣および海南島からは、いはば指呼のあひだにあるといつてもいい狀態だから、日本がぜひともアメリカ艦隊のフイリツピン移駐を阻止しようと思へば、これを武力によつて事前に攻略することも、決してむづかしいことではない。苟くも太平洋戰略の一般に通ずるものからいふと、それはすでに一種の常識ともなつてゐるもので、今更事新しく論ずるまでもないことだ。

尤も、現在の比島防衛司令官ダグラス・マックアーサー將軍のごときは、すこぶる樂天的な見解の持主で、フイリツピンは優にこれを自衛し得るといつてゐる。

それは御職掌柄まことに止むをえないことで、別に大した確信があるといふわけではあるまい。最近の新聞電報など見ても、フイリッピンの防備に關する事項が、種々取沙汰されて居るが、フイリッピン人自身でさへ、それに對しては餘り大した自信がないらしく、大統領マニユエル・ケソンが、最近聲明を發して、政府は軍備を強化する代りに、經濟戰の防備を促進する積りだといつたのも、實は軍備を強化するために、この際いくら多大の經費を投じて見ても、強大な外敵の攻擊に對しては、到底フイリッピンを防禦しえないものだといふ確信に基くものだと噂されてゐる。

日米戰爭そのものに對しては、比較的强氣の持主であるジョン・ガンサーなども、さすがにフイリッピンを守り終せるものだとは思つて居らず、日本の軍隊は、元來敵前上陸に妙をえてゐて、一九三七年の八月には、十日間に七萬五千の軍隊を上海に揚陸することに成功したぐらゐだから、それが同時に數ケ所をえらんでフイリッピンに上陸することになれば、フイリッピンに駐屯する四千五百の正規兵などでは、到底これを阻止し得るものではないといつてゐる。

私はここでこれ以上に餘計な論證はしないことにするが、まづ大體がさういふ立場に置かれてゐるフイリッピンのことだから、アメリカが今あわて込んで多少泥縄的な防備强化を遣つて見たところで、それで直ちにその脆弱性が根本的に除去されるといふものではあるまい。

アメリカ艦隊のフイリッピン移駐を至難とする第二の理由は、その移駐のために行ふ渡洋作戰が、あたかも日本本土に對する進攻作戰と同樣、すこぶる危險性に充ちたもので、あくまでそれを斷行しようとする場合には、かなり大きな打擊を覺悟しなければならんといふことだ。

眞珠灣とマニラ灣とを連絡する航路は、これを直線にして約四千九百海里あるが、この航路の約三分の二强は、全然我が南洋委任統治諸島の眞只中を横斷することになる。一時間十八節の速力をもつて航進しても、約七日半といふものは、明かにこれらの島嶼によつて監視されることになるから、日本の飛行機

または奇襲艦艇による間斷なき襲撃は勿論、時には正規の大艦隊による不意の攻撃をも豫想しなければならぬ。さすれば、フイリッピンへの移駐を目的とするアメリカ艦隊は、それによつて多大の損害を蒙る虞れがあるのみならず、より不利益な事態の下においては、みづから欲せざる決戰を強ひられ、それによつて致命的な打撃を受ける虞れもある。篤とそのへんのことを思案すると、アメリカも容易にさういふ輕はずみな眞似は出來ないことになるであらう。

合計千四百個の大小島嶼より成る我が南洋委任統治諸島は、その總面積僅か八百二十九哩平方に過ぎず、しかもその多くは豆大の珊瑚礁であるから、これを經濟的な立場から見ると、まことに貧弱な島嶼群に相違ない。

ところがそれはたまたまアメリカ海軍の西太平洋に對する二つの進航路に對し、一方では側面からこれを脅威し、他方では正面からこれを管制してゐるから、赤道直下の海に點々青螺のごとく散布するこれらの小島は、西太平洋における我が長大な防衛陣に對し、あたかも強力な前衛的堡壘の役目を勤めてゐる。

從つてフイリッピンに移駐せんとするアメリカ艦隊が、比較的輕微な犧牲によつてその目的を達成しようとすれば、彼等はぜひともこれらの前衛的堡壘に對し、何等かの適當な手段を講ずることによつて、出來るだけ有効にその特異な戰略的機能を剝奪しなければならぬ。

ジョン・ガンサーが、いみじくもこの點に着目し、これ等の島嶼を絞殺してそれを足腰の立たぬ程度にまで叩きつけてしまはないかぎり、吾人の主力艦隊は、これを赤道の彼方に送ることが出來ないといつてゐるのは、たしかに至言といふべきである。

比島の本質的缺陷

アメリカ艦隊のフイリッピン移駐を至難とする第三の理由は、それがよし實現したとしても、現在のフイリッピン群島には、それを養ふに足るだけの施設

船渠のないフイリッピン

かなく、しかもその群島の位置たるや、本國を離ること約四千九百海里の西方にあつて、そのあひだの聯絡を維持することは勿論、本國から必須止むべからざる補給を繼續することさへ、なかなか容易でない狀態にあるといふことだ。

一例を擧げると、戰時の艦隊にとつて最も必要なものは、勿論艦艇の病院ともいふべき船渠の設備であるが、それさへ絶無に近い有樣で、カヴィテの副根據地ともいふべきオロンガポーには、すでに老廢に瀕したデユウエー船渠はあるが、それも辛うじて小型艦船の修理に間に合ふぐらゐなことで、到底大艦巨舶の用に供し得るものではない。その他、兵器彈藥の製造廠にしても、燃料油貯藏所にしても、航空機材の倉庫にしても、飛行機の修理工場にしても、戰時の大艦隊が必要とする諸般の施設は、一として未だ備つてゐないのである。

さうかといつて、戰時の艦隊が必要とするものは、すべてこれを本國または眞珠灣から供給するといふわけにもゆくまい。さういふ無鐵砲なことをすると、それはフイリッピンにある自國の艦隊を養ふといふよりも、むしろ日本艦

米本國とフイリッピンの聯絡

隊を養ふことになるであらう。

完全な武裝を整へた大艦隊が、水も漏らさぬ防衛陣を張つて航行することゝ、多大の危險と犧牲とを覺悟しなければならないといふ海面を、無力嬰兒にも比すべき運送船隊が、間斷なく長蛇の列を成して航行することになれば、私が別に悉しい說明をするまでもなく、その結果の如何は、容易にこれを推知し得るに相違ない。

殊に、アメリカ本國と、本國を離ること四千九百海里の彼方にある艦隊との聯絡は、果してこれを如何にするか。萬事が萬事まで、すべてこれを無線電信に一任して安心してゐるといふわけにも行くまい。本國から布哇へ、布哇からウエーキとグアムとを經由して、フイリッピンのマニラに達するといふ空路を利用する方法もあるが、それには第一にウエーキとグアムとの安全如何といふ問題もあるし、假にその安全が保障されてゐるとしても、戰時非常な警戒が行はれてゐる場合、それが支障なく行はれ得るかどうかも問題だ。これを要す